

NG?



OK?



NG?



コロナ の 真実

あなたの目覚めが世界を救う。

与国秀行

はじめに

「何かおかしい」、今、世界で起きているコロナパンデミック」について、誰もが心の中ではそう感じているのではないのでしょうか？

たとえば2020年7月1日現在、新型コロナウイルスの日本の感染者は1万8593人、死者数は972人ですが、この人数は本当に多いのでしょうか？毎年、モチを喉に詰まらせて窒息死する人は、一月だけでも約1300人です。ですから単純に現時点では「モチ」のほうが、毎年、「コロナ」よりも多くの日本人の命を奪っていることになります。

では、モチを恐怖して、政府から「モチ禁止令」、あるいは「緊急事態宣言」が出されたことがあるのでしょうか？

しかも死者数だけで考えるならば、2019年のインフルエンザの感染者は1200万人を上回り、死者数は約3000人です。1月だけでも一日に50人以上が亡くなり、1500以上が亡くなっています。コロナの感染者の約700倍、死者も約3倍です。しかし政府から「緊急事態宣言」は出されませんでした。

しかもコロナは「飛沫感染」、つまり咳やクシャミによってウイルス感染するわけですが、しかしインフルエンザは「空気感染」、つまり空気によってウイルス感染するのですから、「インフルエンザのほうがよっぽど恐ろしい」という見方も十分できます。

少し数字を見ると、「何かおかしい」、そう感じて当然ではないのでしょうか？

しかもマスコミは、まるで恐怖心をかきたて、パンデミックを煽るような、そうした報道を続けております。たとえばフジテレビ系情報番組『バイキング』は、2020年の5月19日の放送で、許されない捏造報道を行いました。当時はまだ「緊急事態宣言」の最中であり、「間もなく緊急事態宣言が解除されるのではないか？」ということがささやかれている状況にありました。そうした中でその情報番組では、東京原宿の竹下通りの人込

みの映像が映しだされました。そして結論として、「緊急事態宣言・自粛要請を守らず、こんな人混みならば緊急事態宣言は解除できない」と述べたのです。

しかしこの『バイキング』が報じた東京・原宿の人混み映像は、5月17日のものなどではなく、3月のものであることが視聴者の調べで明らかになりました。というのも映像の中で『マクドナルド』の店舗が映っており、商品の「てりたまバーガー」が映っているのですが、「てりたまバーガー」は、3月4日〜4月7日までの限定期間商品であったからです。これを見つけたユーザーが、マスコミの「捏造報道」を見抜いて、ネットで炎上し、フジテレビのアナウンサーが謝罪することになりました。なぜなら人々は「緊急事態宣言」を守っていたために、実際の原宿はガラガラだったからです。

同じような捏造報道は、テレビ朝日の情報番組『羽鳥慎一モーニングショー』でも行われておりました。『モーニングショー』の5月20日の放送で、前日の19日に、千葉市J R蘇我駅に、大勢の鉄道ファンが集まったと報道されました。しかしこの放送に対して鉄道ファンが、詳細な分析も添えて説明したことで、ネットで炎上しました。なぜならやはりかなり前の映像を流して、「このままでは緊急事態宣言を解除できない」という論調で報道していたからです。

つまりテレビ番組が、そろいもそろって捏造報道を行って、「このままではパンデミックがおさまらない、だから緊急事態宣言を解除できない」という論調で報じたわけです。まるでマスコミは、人々の恐怖を煽り立てて、パンデミックを演出しているようです。

真実を見つめていくと、「何かおかしい」と感じて当然なのです。

童話『裸の王様』では、王様は「賢い者にしか見えない服」を着てパレードに出かけ、大人たちは「何かおかしい」と感じつつも、他人の目を気にしながら、「存在しない服」を褒め称えました。しかし幼い子どもが一人



現れて、恐れることなく「王様は裸だ！」と叫ぶと、次々と大人たちも「やっぱりそうだったのか！」と気がつき始めて、次々と「王様は裸だ！」と笑いはじめました。これは今現在、私たちの目の前で起きていることです。

今、日本をはじめ世界の人々は、「二つの戦い」から絶対に避けることはできません。

一つの戦いは、コロナに怯えながら毎日を過ごし、暑い中でもマスクを着けて、政府から「自粛要請」が出たら、それに素直に従って、「緊急事態宣言」が出たら大人しく従っていく、という戦いです。つまり「コロナとの戦い」です。

もう一つの戦いは、「コロナの闇との戦い」です。つまりもしも「コロナパンデミックは何かおかしい」と、そう気がついているならば、この「コロナパンデミック」の背後で本当は何が起きているのか、その情報を自分から探し、膨大な情報から真実を抽出し、そして自分の頭で考え、自分で決断を下して、勇気をもって行動を起こしていく、という戦いです。

人類は今、「二つの戦い」から絶対に逃れることはできず、それはつまり「コロナと戦うか?」、「コロナの闇と戦うか?」という、この問から逃げられる人はいないので。

これを踏まえて述べますが、はつきり言つてマスコミはインチキです。なぜならマスコミというのは「視聴者」のことを第一に考えているのではなく、自分たちの「利益」を第一に考えているからです。単純に言つてマスコミは、お金に絡めとられてしまつて、もはや真実を報道するものではなくなつていのです。そうである以上、マスコミが向いているのは、「視聴者」ではなく「広告主」です。

そのためにこのコロナ禍でも、マスコミが今、最も気にかけているのは、製薬会社をはじめとする大手大企業なわけです。

「自粛要請」、「緊急事態宣言」によつて経済が壊されて、町のお店や小売店、中小企業が潰れていく中でも、実は利益を上げているところはあります。なぜなら人間には必ず衣・食・住が必要ですから、この世に人間が存

在する以上、必ずお金は動き、たとえ軒並み中小企業が潰れたとしても、残るところは残り、儲かるところ儲かるからです。すなわちコロナパンデミックで、中小企業が潰れば潰れるほど利益を得る者たちもいるのです。

童話『裸の王様』の大人たちのように、もしも「何かおかしい」と、そう感じているのであるならば、どうか本小冊子を通じて、真実に気がついてください。そして一人でも多くの方に真実を伝えてください。

一般社団法人『武士道』 特別顧問 与国秀行

インフルエンザワクチンにコロナウイルス

ノーベル賞受賞者のリュック・モンタニエ氏は、次のように発言しています。

「新型コロナウイルスは中国の研究所で人為的につくられ事故で流出した」

また、このモンタニエ博士とタッグを組んでいる数学者のジャン・クロード・ペレズ氏によれば、「新型コロナウイルスは時計職人が行うような精密なもので、自然に存在することはあり得ない」と述べています。そして「新型コロナウイルスは中国の武漢の市場で売られているコウモリから発生した」と言われておりますが、武漢の市場ではコウモリが売られていなかったことが分かっており、実際に中国の武漢には、『武漢ウイルス研究所』があります。

そして『アメリカ国立アレルギー・感染症研究所（CDC）』の所長に、アンソニー・ファウチ博士という人物がおり、彼は2年前に「パンデミック」を予言していました。アンソニー・ファウチは2年前に、「トランプ政権の間にパンデミックが必ず起きる」と断言していたのです。そして彼がトランプ大統領にいろいろとアドバイスすることで、アメリカでは「ロックダウン」が起きました。このアンソニー・ファウチという人物は、1984年から『アメリカ国立アレルギー・感染症研究所（CDC）』の所長を務め、6代に渡って大統領に感染症

の関する助言を行ってきました。

しかしなぜかこのアンソニー・ファウチは、危険な生物兵器の研究を、中国に託しており、『武漢ウイルス研究所』に対して、コロナウイルスの研究費として資金援助までしていました。オバマ政権の頃のことになります。オバマ大統領はアメリカ国内のウイルス研究は中止させる代わりに、2014年から2019年にかけて、5年にも渡って370万ドル、約4億円の援助を行っていたのです。ちなみになぜかフランスまでも、『武漢ウイルス研究所』に資金援助していたことが分かっております。この武漢のウイルス研究所では、コウモリを使ってコロナウイルスに関する研究を行っていました。

ハーバード大学の化学生物学部長を務めるチャールズ・リーバー博士は、2011年から『武漢理工大学（WUT）』の「戦略科学者」となり、その対価として月給5万ドル（約300万円）と、生活費として上限15万8000ドル（約1700万円）が与えられ、研究所の費用としても150万ドル（1億7000万円）ものお金が支給されていきました。中国には「千人計画」というものがあり、中国の大学の規模と威信を高めるために、世界最高レベルの優秀な人材を招致しております。そしてこの教授も、この「千人計画」に参加しており、武漢理工大学に名を連ねていたわけです。しかし彼はアメリカ政府に対して虚偽の報告を行っていたために、2020年1月に逮捕されています。

そして今まさにトランプ大統領は、「オバマゲートに比べたらウオーターゲートは小さなポテトみたいなもの（取るに足らない）」と述べております。「ウオーターゲート事件」とは、ニクソン大統領が辞任に追い込まれた政治スキャンダルのことですが、トランプ大統領は「オバマゲート」について、「米国史上最大の政治犯罪」と述べています。アメリカ国民が支払った税金で、中国の武漢ウイルス研究所を支援するという行為は、アメリカにおいて国家反逆罪にあたらなないのでしょうか？

中国の武漢にある生物兵器研究所から新型コロナウイルスが流出した可能性がある、しかもアメリカのオバマ

政権がなぜか5年にも渡ってその研究所を支援していた、なおかつすでに米国ではその研究所と関わりがあった教授が逮捕されている、さらには『CDC』の所長アンソニー・ファウチ氏は、「トランプ政権でパンデミックが必ず起こる」ということを予言していた、誰がどう見ても「おかしい」のです。

実は医療には多くの問題点が隠されております。なぜなら医療は必ずしも人を生かしてはなく、時に医療は人を次々と殺しており、しかもそれは明らかに意図的ともとれる犯罪性があるからです。では、「癌治療」と「精神医学」の両面から、医学の問題点を考えていきたいと思えます。

癌から見る医学の闇

日本の中央区築地にある『国立がん研究センター』を設立した人物に、武見太郎という医師がいました。彼は『日本医師会』の会長も務め、一説には「15万人の医師が露頭に迷うから癌は直してはいけない」と述べたとも言われております。この発言は残念ながら音声が残っているわけではないので、武見太郎が本当にこんなことを言ったのかどうか、その確証はありません。では、本当に武見太郎医師が、そんなことを言ったのか、まずはそれを検証してみたいと思えます。

日本では今、癌で亡くなる人は増えに増え続け、年間に約40万人、一日に約千人です。しかし「そんなバカな！」と思われるでしょうが、実は癌は治りません。ドイツのDr. レオナード・コールドウェルという医師は、次のように豪語しています。

「90%以上の癌は数週間のうちに完治し、手術も放射線治療も化学療法も必要ない」

「癌細胞はブドウ糖をエネルギー源とする」、これは1931年にノーベル生理学・医学賞を受賞したオットー・ワールブルグ博士が解明し、1923年に論文で発表し、すでに証明されている科学的事実です。

しかし現代の日本の癌治療では、なぜか癌細胞のエサであるブドウ糖をわざわざ癌患者に点滴しています。摘出手術、抗癌剤、放射線治療、これらの「癌三大治療」によって、癌患者の体力が弱まった時、日本の医療現場では、わざわざ癌のエサであるブドウ糖を点滴しているのです。そんなことをすれば癌細胞が元気になり、転移して、癌患者が亡くなって当然です。

また、「実はビタミンCが癌細胞を殺す」、これもノーベル賞を2度も受賞されたライナス・ポーリング博士によって、1970年に発見された驚くべき癌の治療法です。美容や健康のために数グラムのビタミンCを点滴することがありますが、その数十倍の60グラムの高濃度ビタミンCを点滴することで、実は癌は数カ月のうちに消えていくのです。

しかしアメリカで最も権威ある総合病院『メイヨークリニック』の研究者が、一流の科学雑誌に「ビタミンC癌治療は効果がない」と発表しました。そのために、この「ビタミンCによる癌治療」は否定されてきました。

そして「高濃度ビタミンの点滴治療」の代わりに抗癌剤ばかりが売れて、製薬会社を儲けさせ、そして多くの癌患者が殺されてきたのです。ちなみに一番高い抗癌剤「ベグイントロン」は1グラムで3億3170万円、50 μg （マイクログラム）では1万2192円です。1 μg （マイクログラム）は100万分の1グラムです。

1985年、『アメリカ国立ガン研究所（NCI）』のデヴィタ所長は、米議会において、「分子生物学的に見ても抗癌剤でガンは治せない」と証言しています。しかも世界初の抗癌剤は「マスタートガス」という第一次世界大戦中に、ドイツで開発された毒ガスから作られたものでした。マスタートガスという毒ガスを使って、細胞の分裂を抑えるという治療法が発見されたわけです。そしてその後の抗癌剤も、基本的には「細胞分裂を抑える」という人体にとって攻撃を行う強い毒物であります。そのために抗癌剤の取り扱いは、基本的に手袋やマスク、ガウン、ゴーグル、キャップなどの防護具を使用しています。

日本の国防費がわずかに約5兆円なのをたいして、日本の医療費は約44兆円、日本人一人当たり約34万円、

その中でも癌利権だけでも約15兆円ですから、どれだけ間違った癌治療が誰かたちを儲けさせて、そして誰かを殺しているかが分かります。

だから『癌は5年以内に日本から消える!』という書籍を書かれた医師の宗像久男さんは、日本国民にこう呼びかけるのです。

「皆さん起きてくださいよ!日本人は殺されているよ!」

こうしたことを考えると、「国立がん研究センター」を設立した武見太郎医師会会長が、

「15万人の医師が露頭に迷うから癌は直してはいけない」と述べたのではないかという話も、十分に納得できますし、医学に問題があることも少しは垣間見えたのではないでしょうか?

精神医学は科学ではない

「癌治療」という面から、お金の支配されている「医学の問題点」について考えてみました。 「コロナパンデミック」によって、ワクチン接種が目前に迫る今だからこそ、もう一段、二段、深く「医学の問題点」について考えてみたく思います。そして「医学の問題点」に深く迫るのならば、やはり「精神医学の闇」を見つめることが手っ取り早いと言えるでしょう。

たとえば足が折れて病院に行く場合、あるいはインフルエンザに罹ったかもしれないから病院に行く場合、こうした時、まず医師は検査を行って、「レントゲン」などを見せてくれて「足が折れている」、あるいは「ウイルスに感染している」と、科学的根拠を示して患者に教えてくれます。それが医学であり、そして科学というものです。科学とは誰がやっても同じ結果になるものです。これを「科学の再現性」と言い、Aさんが実験をして



も、Bさんが実験しても、同じ条件ならば同じ結果になるのが科学の大原則であり、そして医学というものは科学を根底に持っております。

しかし実は精神医学というものには、この「科学の再現性」が存在せず、まったく科学的根拠が無いのです。実は精神医学は、単なる「仮説」に基づいて診断しているに過ぎないのです。この仮説のことを「モノアミン仮説」と云います。

「モノアミン」とはドーパミン、ノルアドレナリン、アドレナリン、セロトニン、ヒスタミンなどの神経伝達物質の総称のことです。このうちノルアドレナリン、ドーパミン、セロトニンという化学物質が、精神的な病と密接な関連があり、それがうつ病、パニック障害、不安障害、統合失調症などを引き起こしている、という仮説、それが「モノアミン仮説」なわけです。つまり脳内にある「セロトニン」、「ノルアドレナリン」、「ドーパミン」、これらの脳内の化学物質のバランスが崩れているから、人間はうつになったり、パニック障害になったり、不安障害になったりするのである、という仮説が「モノアミン仮説」なわけです。

そして精神科医たちは、この仮説に基づいて、患者の話を聴いて、「貴方はうつ病です」、「貴方は不安障害です」と、診断を下して、次々に薬を処方して、その脳内のバランスの改善を試みているわけです。

まったくもってバカげた話です。なぜなら実のところ、その脳内の「セロトニン」、「ノルアドレナリン」、「ドーパミン」のバランスなどは、科学的に測ることも、見ることもできないからです。CTやMRIという医療機器によって、脳内の構造を調べて、脳出血・脳梗塞・脳腫瘍などを発見することはできます。また脳内の血流の流れを測定することもできます。しかしCTやMRIなどは、「セロトニン」などの脳内の化学物質を調べているわけではないのです。「モノアミン仮説」の話聞けば、誰もが「医者たちは脳内のそれらの化学物質をどうにかして計測して、バランスが崩れていることを見つけ出して、うつとか、パニック障害と診断しているのだらう」と想像を巡らせるわけですが、実はまったくもってそうではないということです。

そのために「精神科医」を名乗る者たちというのは、単なる主観で、あるいは予測と憶測で、もしくは独断と偏見によって診断を下して、そして薬を処方しているのです。ですから一人の患者に対して、医師によって診断結果も異なれば、診断方法も大きく異なります。たとえば相模原の障害者施設で、一人の男によって19人もの人々が殺害され、26人が負傷するという悲惨な大事件がありました。この犯人に対して4人の精神科医たちは、それぞれ合計7つのもの異なる病名をつけたのです。

これは先ほど述べた「誰がやっても同じ結果になる」という科学の大原則にかなったものではまったくありません。このように精神医学は科学ではないのです。しかし「内科や外科などの他の医学が科学だから、精神医学も科学なのだろう」と多くの人々が誤解、錯覚しているわけです。

しかも日本では、精神疾患にかかる人の数が、ここ十数年で激増して、約420万人もいます。それは精神医学が、心の病を治していない最大の証拠と言えるでしょう。そしてさらに問題なのは「精神薬」です。うつ病は「自殺予備軍」と呼ばれることもあるというのに、うつ病の薬「パキシル」の添付文書には、はっきりとこう記されているのです。

「自殺に関するリスクが増加するとの報告」、「自殺企図のリスクが増加するとの報告」

米田倫康という方が書かれた『発達障害のウソ』という書籍によれば、10歳の男の子が「うつ病」、「注意欠陥多動性障害」、「行動障害」と診断されて、この「パキシル」を処方されて、2013年6月14日に自殺したそうです。しかし「パキシル」の添付文書には、こうも記されているのです。

「警告 海外で実施した7〜18歳の大うつ病性障害患者を対象としたプラセボ対照試験において有効性が確認できなかったとの報告、また、自殺に関するリスクが増加するとの報告もあるので、本剤を18歳未満の大うつ病性障害患者に投与する際には適応を慎重に検討すること。」

つまり「18以下のうつ病には効果が無く、自殺の可能性がある」というわけです。この薬を10歳の子ども

に処方することは、殺人ではないのでしょうか？あるいは「ジェイゾロフト」という抗うつ薬にも、やはり同じく「自殺念慮、自殺企図のリスクが増加する」との報告がある」と明確に記されております。

名古屋市の25歳の男性は十分な診察もないまま、医師から処方した向精神薬を服用し続けて、依存症になった末に自ら命を絶しました。この男性が向精神薬を服用し始めたのは19歳の時でした。体の不調を訴え、名古屋市内の精神科クリニックで診察を受けると、医師はわずかな時間でうつ病と診断し、「リタリン」という向精神薬を処方しました。最初、この男性の表情はイキイキとし、元気を取り戻したかのように見えました。しかしすぐに不眠や体のだるさを口にして、「リタリン」の服用量が増えました。彼は別の病院やクリニックを次々と掛け持ちして受診して、いつしかこの「リタリン」という薬を大量に集めるようになりました。彼が自殺して亡くなった際、彼の部屋には、リタリンの空き瓶や大量の処方せんが散乱していました。30以上の医療機関が、彼に「リタリン」を処方しており、彼のパソコンには「リタリンをやめるためにはどうすればいいのか」と書き残されています。

実は「リタリン」は覚せい剤と同じ中枢神経刺激薬です。そのためなのか、「リタリン」の依存症になる人が増えて、違法売買、処方箋の偽造、窃盗にまで手を出す人が出て、安易に処方していた精神科クリニックが次々と摘発される事態となり、密かな社会問題となりました。

精神科医の西城有朋という方が書かれた『精神科医はなぜ心を病むのか？』という書籍によれば、精神科医は一般人の5倍も自殺しているそうです。アメリカの精神科医の自殺者数は、一般人の7倍、若い成り立ての精神科医の場合は10倍の自殺率だそうです。まさに精神医学が、人の心を治せないために、精神科医こそ心が病んでいるわけです。

「パキシル」や「ジェイゾロフト」といった抗うつ薬の添付文書に、「自殺」の文字があるように、向精神薬には必ずと言ってよいほど副作用が伴うものです。そして精神薬の副作用のことを「賦活症候群^{ふかつしやうこうぐん}」、または「ア

クチベーション・シンドローム」と言います。

かつてタレントの飯島愛さんがマンシヨンの一室で、孤独死しているところを亡くなってから数日後に発見されたことがあります。彼女も向精神薬を飲んでいたことが分かっております。しかし遺書が無いために「自殺」ではなく「変死」にされました。実は現在の日本では、「自殺」と断定できない場合、「変死」にされており、日本の年間の変死者の数は約15万人です。420万人も精神疾患で苦しんでいる人がいる以上、この15万人の変死者と抗うつ薬は、おそらく何らかの因果関係があるでしょう。

向精神薬を飲んで「死にたい」と思わない場合は、「殺したい」と考えてしまうこともよくあります。つまり自殺に向かわない場合、暴力や殺人に向かつてしまうことがあるわけです。実のところ近年起きている凶悪事件の背後には、かなりの確率で向精神薬が関与しています。「全日空61便ハイジャック事件」、「西鉄バスジャック事件」、「池田小事件」、「秋葉原通り魔事件」などがそうです。あるいはアメリカで起きた「コロナバイン高校銃乱射事件」なども向精神薬が関係していました。

こうした事実から、医師たちの中にも「精神医学は医学ではない」とまで口にする人々さえ実は大勢いる始末です。それでも多くの人々が、未だに精神医学を信じており、「人生」という一冊の問題集が解けず、悩み。苦しみ、悲しい、心疲れると病院に行き、薬を飲んでいるわけです。

「発達障害」という診断にも問題がある

こうした科学的ではない診断、そして処方されている向精神薬の矛盾は、精神科医が診断を下している「発達障害」においても、まったく同じことが言えます。もちろん人それぞれ個性は様々ですし、大勢の人とは異なっている思考と行動をする人もいます。

しかし精神科医たちは、科学的な根拠を持たずに、「脳機能障害」という最もらしい言葉を使って、特に子どもをはじめ多くの人々に、「アナタはADHD（注意欠陥・多動症）です」、「アナタはLD（学習障害）です」と、次々に判断を下しております。大人に「ウツ」と診断して、ウツ病の薬を処方して改善が見られないと、医師は次に「発達障害」と診断して逃げ口上にする場合もあるようです。

私が親しくさせて頂いている米田倫康先生の著書『発達障害のウソ』をもとにお話しさせていただきますが、医療において日本で最も「権威」ある厚生労働省が運営されている『みんなのメンタルヘルス総合サイト』では、「発達障害」について次のように記されているようです。

「発達障害とは生まれつきの特性で、病気とは異なります。発達障害は幾つかのタイプに分類されており、自閉症、アスペルガー症候群、注意欠如・多動性障害（ADHD）、学習障害、チック障害、吃音（症）^{きつおん}などが含まれます。これらは、生まれつき脳の一部の機能に障害があるという点が共通しています。（以下省略）」

ここに書かれていることの中には、「事実」と「単なる意見」の二種類が混在しております。この文章の中の「生まれつきの特性で」、これは「仮説」に基づいた「単なる意見」に過ぎません。一方で「病気ではありません」という一文は「事実」です。確かに今現在、「発達障害」と呼ばれているものは、けっして「病気」ではなく、またそう診断された人も「病人」ではありません。ですからこの一文は事実です。そして最後の「生まれつき脳の一部の機能に障害があるという点が共通しています」、この最後の一文は、まったく科学的根拠を持たない仮説に基づいた「単なる意見」にしか過ぎません。

しかし何よりも問題なのは、「厚生労働省」という医療における日本の最大の権威が、あたかもすべて「事実」であるかのように、堂々とネットですべて述べていることです。

そして精神科医たちが、「アナタはウツ病です」と科学的根拠を持たずに診断を下しているように、科学的根拠を示せない精神科医たちによって、こうしている今現在も、子どもをはじめ大勢の人々が次々と、「発達障害」

と診断されているわけです。その結果、「発達障害」はバブル的に激増しており、いつしか日本は、「発達障害大国」となっていました。

その結果、ADHDの処方薬として、「コンサータ」、「ストラテラ」や「インチュニブ」という薬は売上を激増させて、製薬会社を大儲けさせてきました。なぜならNHKを始めとするマスコミが、「正しく理解して」などと称して、これまで「うつ病キャンペーン」、「発達障害キャンペーン」を大々的に行ってきたからです。このマスコミのキャンペーンは、果たしてどれだけ製薬会社を儲けさせたのか、それを考えるだけでも恐ろしくなります。なぜなら「精神医学」は科学的根拠を持たずに診断を下し、なおかつ向精神薬には「賦活症候群」という副作用があるからです。普通に考えれば、「製薬会社からマスコミにお金が流れているのではないか？」と疑ってしまいます。

そしてついに2019年3月26日、「脱法覚醒剤」とさえ呼ばれる「ビバンセ」というADHD薬が、厚生労働省によって承認されました。この「ビバンセ」というADHD薬は、体内にある赤血球の酵素と科学反応して、「アンフェタミン」という物質に素早く変化します。では、「アンフェタミン」とは何でしょうか。『ウイキペディア』の「アンフェタミン」のページにはこう記されております。「覚醒剤とはアンフェタミン類の精神刺激薬である。」

つまり「ADHD薬・ビバンセ」は、体内で科学反応して、「アンフェタミン」になるわけですが、それはまさに「覚せい剤の物質」なわけです。つまり「発達障害大国・日本」は今後、子どもたちをはじめ多くの人々に、科学的根拠の無いまま次々と「発達障害」という診断を下して、そして「障害」という重苦しいレッテルを張るばかりか、合法的に覚醒剤を飲ませていくことになるわけです。はっきり言って現在の日本の状況は、「悪魔的に狂っている」と言えるでしょう。

根本から問題がある精神医学

さて、コロナが世界を襲い、そして人類全体がワクチンを接種するか否かの時代ですから、医学の闇をさらに知るために、もう一段、精神医学について考えてみたいと思います。

世界で最初の向精神薬「ソラジン（クロルプロマジン）」が登場したのは1954年です。この「ソラジン」は、もともと合成染料として開発されました。染料とはもちろん色を着ける材料のことです。そして次にこの「ソラジン」は、豚の寄生虫駆除剤として使用されました。染料が豚の身体に巣くう寄生虫を駆除することに役だっただけです。

そしてこの「ソラジン」を薬として使用すると、人の運動制御機能を遮断することも分かりました。つまりこの「ソラジン」を人に飲ませると、その人は動かなくなり、やがて感情がなくなる、ということが分かったわけです。恐ろしいことに、「ソラジン」は今でも多くの人に処方されています。

しかし驚くかもしれませんが、「精神医学」はこの向精神薬が開発される以前、「精神外科」に頼っておりました。「精神外科」とは、読んで字のごとく「脳を切り取る外科手術」のことです。代表的なものに「ロボトミー（前頭葉白質切除術）」というものがあります。ロボトミーの種類として、「ロボトーム」という長いメスで前頭葉を切るものもあれば、眼球の入っている頭蓋骨の部分、つまり目玉の穴から、アイスピックのような器具を大脳にまで到達させて、神経繊維を無造作に切断する恐ろしいものまであります。

かつては「医学・精神外科」の美名のもとに、多くのロボトミー手術が行われておりました。しかしケネディ大統領の妹ローズマリー・ケネディがロボトミー手術を受けて、知的障害の後遺症を負うなど、世界中で数多くの問題が起こったことで、いつしかロボトミーは行われなくなっていきました。

これだけでも十分に恐ろしいのですが、では「ロボトミー」の前は何を行っていたのかと言えば、「電気ショック療法」、「電気痙攣療法」です。「Electro Convulsive Therapy」の頭文字を取って、「ECT」とも呼ば

れるこの電気ショック精神療法は、過去数十年にわたって、うつ病治療などに用いられてきました。しかしこの「ETC」という治療法は、「記憶喪失」を引き起こすなど、重大な副作用があるために、やがて「ロボトミー」に代わっていったわけです。

そしてこの「ロボトミー」でも知的障害の後遺症が数多くでたために、この「ロボトミー」に代わって誕生したのが、「ソラジン」という世界最初の「向精神薬」だったわけです。ちなみに「電気痙攣療法」は、今もカチを変えて復活して行われております。もつと古く精神医学の歴史をさかのぼると、「治療」と称した拷問のようになっけていきます。実のところ精神医学の歴史は、拷問から薬へと変化する暗黒の歴史だったのです。つまり科学的根拠を持たず、治すこともできていない精神医学は、実は成立から大きな問題があったわけです。

なぜなら「精神医学」は、唯物論と優生学を根拠に持っているからです。「唯物論」とは「魂など存在しない。物しか存在しない」という考え方であり、「優生学」とは、チャールズ・ダーウィンの従兄弟であるフランシス・ゴルトンによって唱えられた「優秀な遺伝子だけを残して、劣等な遺伝子は排除していくべきである」と考える思想です。スウェーデンでは、1930年代から1970年代まで、この「優生思想」を背景にして、障害者に対して強制的な不妊手術が実施されてきました。あるいはナチス・ドイツもユダヤ人を迫害したり、障害者を殺害しておりましたが、やはりその根本にはこの「優生思想」を持っておりました。

こうした唯物的優生思想を根拠に持っているからこそ、精神医学は大問題なのです。そしてこの間違った精神医学が、根拠としている書籍が『DSM 精神疾患の診断・統計マニュアル』です。この『DSM』という書籍こそ、精神科医たちがバイブルとして使用し、そして診断の根拠にしている書籍です。

しかしこの『DSM』こそ問題なのです。なぜなら精神科の医師たちが、科学的根拠を持たずに、自分の主観と偏見と独断でもって診断と処方を行っているように、この『DSM』を作っている者たちもまた科学的根拠を持たずに、自分たちの主観と偏見と独断でもって、「精神病」を次々に作りあげてきた歴史があるからです。

ネットやDVDなどで、ドキュメンタリー映画『診断・統計マニュアル…精神医学による悪徳商法』をご覧になればよく分かりますが、男性の医師たちがトイレで用をしながら、「こんな精神病はどうだろう」と話し合っていて、そして会議室に戻り、多数決を行って、その精神病が認定されたこともあるそうです。小さな部屋で精神科医たちが幾人も集まって、意見を出し合い、一番大声を出した精神科医の意見が通ったこともあったそうです。参加した医師の話によれば、それはむしろ会議というより「オークシオン」のようだったと言います。

こうして最初はたったの3つしかなかった精神障害の数は、どんどん増えていき、今では374にまで増え、世界中の1億2000万人が次々と「精神病」と診断され、そして日本でも約420万人が精神疾患と言われているわけです。

ドキュメンタリー映画の中で、精神科医の言葉として次の言葉があります。

「DSMはまともではなく、この本にある多くの障害は、厳密に検証されたわけではない。患者とDSMを渡されても仕方がない。この本をもとに診断したら、少なくとも20通りの診断ができる。」

実際に、そのドキュメンタリー映画では、精神科医が診断している隠し撮りの映像があります。そこには通院者が「なぜ私は適応障害なのですか？」と問いかけても、その精神科医は「あなたを見た印象から、X線にかけて診断するわけではない、偶然のものである」となどしか答えられませんでした。しかし見た目や偶然で「障害」と診断され、自殺や殺人といった副作用のある薬を処方されたら、たまったものではありません。

ジョンという7歳の少年は、わずか15分の診断で「リタリン」という薬を処方されました。わずか15分で不安障害と診断された女性もいます。10分くらいの診断で、不安とウツ障害があると診断された男性もいます。ある男性は多くの医者から異なった様々な病名を診断され、それぞれ違った薬物を与えられたそうです。本人には何も質問せず、母親にだけ質問して精神疾患と診断を下された女性までいます。

そしてこれらの診断は、かならず精神薬に結び付きます。つまり製薬会社の利益と精神医学は、非常に密接に

繋がっているということです。なぜならもし精神科医が、心苦しんでいる人に対して、「貴方は何も問題はない、その症状を解決するために薬を飲む必要はない」と言ったら、大したお金も取れず、自分たちの仕事も無くなってしまうからです。すなわち『DSM』という書物は、心の病を脳内の化学物質の不均衡に置き換えて、薬物療法を正当化するために創り上げられた、精神科医たちのバイブルなわけです。

しかももしも患者が、処方された薬を拒否した場合、それもまた「精神障害」と見なすことができる、『DSM』には書かれてあります。さらに精神科医には多大な権限が与えられていて、誰か一人の家族の同意さえあれば、精神病院に強制入院させることまで可能です。本人が向精神薬を飲むことを拒否して、家族の同意があれば、精神病院に入れることが可能なのです。そのために家族が遺産目当てに、精神科医と共謀して、母親を強制入院させて、薬漬けにすることで、本当に精神に異常をきたしてしまう、ということも起きています。そして今、精神科病院では「身体拘束」が増えています。厚生労働省の調査によれば、その数は1日1万人以上、ここ10年で2倍以上にも増えています。精神病院から死亡退院する人は一か月に約二千人です。

さて、「癌治療」、「精神医学」の面から医学の問題点について考えてみました。癌は治るのに治る治療をしない、精神医学にいたっては、そもそも科学的ではなく、医学と呼べないものである、こうしたことが少しはご理解いただけたはずです。これらを踏まえて「パンデミック」の闇に迫ってみたいと思います。

PCR検査に問題がある

現在、新型コロナウイルス感染症の陽性、陰性の診断は、「PCR検査」と呼ばれるものが行っていますが、果たしてこの「PCR検査」は、本当に正確なのでしょうか？

タンザニアのジョン・マグフリ大統領は、2020年5月3日、国立研究所に動物や果物、自動車燃料などを

「ヒトの検体である」として検査に持ち込みました。検体とは、医療検査に必要な材料のことで、血液・髄液・ずいえき尿・細胞などのことです。大統領が密かに持ち込んだパイア、ウズラの卵、ヤギからも、コロナの陽性反応が出たそうです。

こうしたことを受けて5月4日、タンザニア政府は国立研究所の所長と幹部を停職処分しています。そしてジョン・マグフリ大統領は、「国立研究所が規則違反を繰り返していた」と非難しています。ジョン・マグフリ大統領は、新型コロナウイルスによる影響を一貫して軽視しております。

『米国疾病予防センター（CDC）』のホームページには、「PCR検査」について記されておりますが、その36ページの注意事項には、次のような英文があります。「*Detection of viral RNA may not indicate the presence of infectious virus or that 2019-nCoV is the causative agent for clinical symptoms.*」

これを和訳しますと、「PCR検査で検出されたウイルスの遺伝子は、感染性のウイルスの存在を示しているとは限らず、新型コロナウイルスが臨床症状（肺炎など）の原因とは限らない」という意味です。つまり「PCR検査陽性⇨新型コロナウイルス感染とは言えない。PCR検査陽性をもって肺炎を引き起こすとも証明できない」と、『米国疾病予防センター（CDC）』の「PCR検査」の説明文の中で明確に述べているわけです。

しかも「PCR検査」のキットが、新型コロナウイルス以外の他の様々なウイルスでも、「陽性反応」になることまで明確に記載されています。それらの他のウイルスとは以下のものです。

・インフルエンザウイルスA型 ・インフルエンザウイルスB型 ・RSウイルスB型
・アデノウイルスタイプ3タイプ4 ・パラインフルエンザウイルス3 ・マイコプラズマ肺炎 ・肺炎クラミジアなど」

極めて重要な事実を述べますが、「そもそもPCR検査はあてにならない」ということが確かに言えるのです。一般社団法人『疫学会』のホームページにも、「Q1: 新型コロナウイルス検査は、どのくらい正確なのですか？」

という質問に対して、「実際の感染者に対してPCR検査がどれほど正しく診断できているかについての正確性の計算がまだできていません」と明確に書かれております。そのあてにならない「パイパイ」でも、「インフルエンザ」でも、「クラミジア」でも「陽性」と診断を下す「PCR検査」によって、毎日、毎日、感染者数が報道されているわけです。

ちなみにアメリカでは、2020年2月までは、「新型コロナウイルス」よりも、「インフルエンザ」の方が大問題でした。2019年10月1日から2月1日までのわずか4か月の間に、アメリカ国内で合計で約2200万人から約3100万人がインフルエンザにかかり、1万2000人から3万人が亡くなったと推定されています。しかしすでに述べましたように、「PCR検査」はインフルエンザにも反応してしまいます。普通に考えて、インフルエンザを新型コロナとカウントしての可能性は捨てきれないわけです。

日本でも今年のインフルエンザ患者数は約720万人で、昨年と比べると500万人近くも激減しております。つまり本当はただのインフルエンザであったけれども、インフルエンザ検査ではなく、PCR検査を受けたために「コロナに感染している」と診断されている人がいたとしても、けっして不思議ではないわけです。

しかもネットに動画も上がって騒がれましたが、中国のコロナ検査では、検査のやり方にそもそも問題がありました。なぜなら検体のサンプル接種後、検査キットには番号もつけられておらず、20人分のサンプルを一つの瓶に入れていたからです。これでは誰のサンプルかまったく分かりません。しかも約3800世帯、約6000人が居住している地域で、「PCR検査」が行われたわけですが、わずか600キットしか持って来なかったのです。その動画の中で、検査を受けるために数時間も並んだ住民たちは、「こんな検査に何の意味があるのか？政府は住民を騙すために検査をしている！」と、そう怒りをあらわにしておりました。

癌治療や精神医学といった医学の闇を前提に、「PCR検査」について触れましたが、このようにパンデミックについて考えていく時、その感染爆発の根底にある「PCR検査」には、そもそも大問題があったのです。

水増しされるコロナ感染者と死者

米国の議員であり、医者でもあるスコット・ジェンセン氏は、フェイクニュースばかり流すアメリカのマスメディアの中で、ともに報道している『FOX NEWS』のインタビュアーで、次のように答えました。

「今コロナ患者が入院したら、病院側に1. 3万ドル（140万円）が支払われ、もしもその患者が人工呼吸器を使用するならば、病院側に3. 9万ドル（約420万円）支払われことになっています。

あるいはイタリアでコロナで死亡したとされる人の死亡診断書を、イタリア国立衛生研究所が再検証したところ、コロナが死の直接の原因だったものはわずか12パーセントに過ぎず、残りの88パーセントは最低でも他に一つは病状がありました。」

つまり米国ではコロナ患者が入院したら、政府から病院側にお金が支払われ、もしもその患者が重篤ならば、さらに多くのお金が支払われている、そのために病院側はコロナ感染者を水増しをしている、というわけです。PCR検査に問題があるだけではなく、このように感染者を受け入れる病院側にも、やはり問題があるわけです。

さらにスコット・ジェンセン医師は言います。

「アメリカの厚生省から病院に7ページの文書が届きました。その文書には、ある高齢者がたとえ肺炎で亡くなったとしても、その人が生前、接触していた息子がもしもコロナの陽性になったら、その高齢者の死亡診断書には『コロナが原因』と書く、ということが適切だと述べられていました。

これはこれまでの死亡診断書の書き方ではありえないことであり、これではバスに轢かれて死亡しても、PCR検査にかけて陽性であったら、コロナで死亡したことになってしまいます。」

実はコロナの死亡診断書の書き方は、これまでの死亡診断書の書き方とは、まったく異なった書き方がされており、つまりコロナの感染者のみならず、死者数までも水増しされているわけです。

しかも米厚生省からスコット・ジェンセン氏のもとに届いた、コロナに関する文書には次のように記されてい

たそうです。「死因をCOVID-19と計上することに関して、COVID-19が絶対的な死因と判明できないものの、その可能性や疑いが高いなら、それがある程度、確信できる範囲なら死亡診断書にCOVID-19と記入することが許されます」と。これではまるで米政府が、コロナ死者数の水増しを病院側に支持しているかのようです。つまりPCR検査と患者を受け入れる病院のみならず、死亡診断書の書き方を指導している『米厚生省』にも問題があったわけです。

「政府と病院とマスコミがグルになって、コロナの感染者と死者数の水増しを行っている」、これは信じがたい事実ですが、その証拠があります。証拠の一つとして、フロリダではコロナで亡くなったとされる人の遺体が並べられました。しかし片手で軽々と運んでしまっているところが写真におさめられています。黒いビニールの中に入っているのは、人間の遺体ではなくマネキンと考えるのが普通ではないでしょうか？

あるいは「コロナと戦っている医療従事者を応援しよう」という流れは、アメリカでも、日本でも行われていることですが、しかしその一方で、こうした水増しの話を裏付けるかのように、「実は病院はガラガラだ」という映像、もしくは医師たちの内部告発の声が、次々にネットに上がっています。

緊急事態宣言は本当に正しいのか？

徳島大学の免疫生物学名誉教授である大橋眞氏（まこと）によれば、こうした新型コロナウイルスなどの病原体ウイルスの存在の確認は、基本的に「コッホの原則」というものを満たす必要があるそうです。「コッホの原則」とは、



ドイツの細菌学者ロベルト・コッホによってまとめられた、感染症の病原体を特定するための指針だそうです。それは次の4点です。

1. ある一定の病気には一定の微生物が見出されること
 2. その微生物を分離できること
 3. 分離した微生物を感受性のある動物に感染させて同じ病気を起こせること
 4. そしてその病巣部から同じ微生物が分離されること
- 専門的で難解ではありますが、この4点を満たすことで、はじめて病原体として認められ、ワクチンの開発もできるのだそうです。

では、「新型コロナウイルス」は、この「コッホの4原則」をどの程度、満たしているのでしょうか？大橋名誉教授の話によれば、現時点で「新型コロナウイルス」は、第一段階さえ満たしていないのだそうです。世界中の多くの人々が、今なおコロナに対して、強い恐怖を心抱いているように、実は未だに新型コロナウイルスについて何も分かってはいない、というのが現実なのです。

実際に世界中で密かに言われていることとして、「コロナによる死因はインフルエンザのような肺炎ではなく、実は血栓症ではないか？」という噂さえあります。「肺炎」というのは、肺が細菌やウイルスなどに感染して、炎症を起こしてしまう病気です。一方で「血栓症」というのは、血管が血の固まりによって塞がってしまう病気です。専門家の話によれば、細菌やウイルスの感染によって、血栓症になることは決して珍しいことではないそうです。

「肺炎なのか？血栓症なのか？」、未だ何も分かっていない新型コロナウイルスであり、しかもこのウイルスは「飛沫感染」しかしません。にもかかわらず世界各国の政府は、「自粛要請」、「緊急事態宣言」を出して、「ロックダウン」までしている国まであるのです。

しかもこうした「自粛要請」、「緊急事態宣言」は、「免疫学」からすると、実におかしなことだそうです。なぜなら世の中には、ウイルスや細菌があふれているからです。たとえば「免疫学」の専門家の意見として、「赤ちゃんが産まれたらペットを飼うと良い」という意見があります。なぜなら乳児期にペットと過ごすことによつて、腸内細菌が増えて、「免疫力」が高まると言われているからです。「赤ちゃんは免疫力が弱いからペットを飼えない」と想ったら、実はまったく正反対だったわけです。また、子どもが泥遊びをすることは、洗濯する側にとつてはとても厄介ですが、しかし土の中には沢山の雑菌がいるために、小さな頃から雑菌に触れることで抵抗力・免疫力を養うことができます。

つまり人間が重い重量を持つことで筋肉を鍛えられるのと同じで、私たちは細菌やウイルスに触れることによつて、免疫力を高めることができるわけです。なぜなら世の中にはもとからウイルスや細菌であふれており、人の身体はウイルスや細菌などに一度感染することで、体内に抗体を作り、免疫力を高めることができるからです。

そしてこの仕組みを利用しているのが、実は「ワクチン」です。ワクチンとは、ウイルスや細菌などを処理して作った薬剤のことです。もちろんワクチンにはいろいろと問題がありますが、一応、「ワクチン接種」には、安全なカタチでウイルスや細菌を体内に一度入れることで免疫力を高める、という狙いがあるのです。

では逆に、どういったことをすると、人間は免疫力を下げってしまうのでしょうか？

一つには「ストレス」です。「ストレス」とはやりたくないことをする、我慢しなければならぬことをするなど、こういったストレスを感じる時に人は免疫力を下げます。つまり心と体は繋がっているために、心が落ち込むと免疫力が下がるのです。

二つ目は「過食と運動不足」です。つまり体の健康を壊すと免疫力が下がるわけです。特に現代では添加物、遺伝子組み換え食品が増え、運動する機会も減っていますので、これらには注意が必要です。健康と免疫力は密接なわけです。

三つ目は「過度の除菌」です。手洗いやうがいなどの適度の除菌は大切ですが、しかし赤ちゃんがペットに触れたり、子どもが泥遊びをして雑菌に触れることで免疫力が高まるように、過度に除菌し過ぎて細菌やウイルスを遠ざけ過ぎても、やはり免疫力が落ちてしまうそうです。

これまでインドネシアでは、肌の色と社会的階層の高さが関連づけられる風習から、インドネシアの人々は美白意識が高く、「日光浴は観光客のすることだ」と考えられてきました。しかし「日光浴で新型コロナを撃退できる」と話題になり、インドネシアで今、「日光浴」がブームになっていきます。なぜなら人間は日光を浴びることによって、「ビタミンD」という万能ビタミンを体内で生成することができます。元北里大学の教授で、日本細菌学会名誉会員の熊沢義雄氏は次のように述べています。「（食事や日光浴などによって得られる）ビタミンDには、免疫系の細胞の働きを良くする作用がある」と。

そして医師にして科学者のジュディ・マイコヴィッツも次のように言っています。

「マスクを着けるのは、実際に自身のウイルスを活性化させてしまいます。自分のコロナウイルスを再活性化して、病気になるんです。なぜビーチをクローズするんでしょう？狂気です」

元から私たちの身の回りには、すでに旧型のコロナウイルスがあり、これが原因で風邪になることもあります。そしてジュディ・マイコヴィッツは、コロナウイルスが新型にしる、旧型にしる、「マスクを着けることはウイルスを再活性化させてしまう」と、驚愕の事実を述べているわけです。しかもビーチをクローズすることは、狂気の沙汰だと彼女は言います。なぜならビーチは日光浴も出来るばかりか、砂や海水から私たち雑菌に触れて、免疫力も高めることができるからです。

つまり「緊急事態宣言」や「ロックダウン」によって、国民を自宅に閉じこもらせて、「ストレス」を抱えさせて、日光浴もさせずに青白くさせて、そうした「ストレス」から「過食」に向かわせて、なおかつ「運動不足」にして、そして「過度の除菌」を呼びかけて、マスク着用を呼びかけ、海水浴場を閉鎖する・・・、今、政府が

行っている対応は、まさに免疫力を下げてしまうものばかりなのです。

ワクチンに入っている奇妙な成分

改めて述べますが、「COVID-19」とも、「新型コロナウイルス」と呼ばれているものは、「コッホの4原則」の最初のステップさえクリアしておりません。そして何も分かっていないにもかかわらず、なぜかアメリカの製薬会社やバイオ医薬品メーカーは、今年7月以降から、アメリカでワクチンの供給を始めると発表しています。日本の厚生労働省も、「2021年前半から全国民にワクチン接種を始めていきたい」と述べております。

では、ワクチンは本当に安全なのでしょうか？

すでに述べてきましたように、医学には様々な問題があり、そして実はワクチンにも様々な問題があります。すでにアメリカではケネディJr. やトランプ大統領が、ワクチンを問題視してきました。ケネディJr. は言います。「ワクチン接種はホロコースト（大虐殺）と同じ」と。

たとえば多くの製薬会社が、様々な種類のインフルエンザワクチンを販売しておりますが、インフルエンザワクチンの中には、「チメロサル」という成分が入っているものがあります。「チメロサル」とは、「水俣病」の原因になった水銀です。

あるいは添付文書を読めば分かりますが、『サーバリックス』という子宮頸がんワクチンには、「イラクサギンウバ」という蛾の幼虫の細胞が入っています。あるいは『ガーダシル』という子宮頸がんワクチンには、成分として「ホウ酸ナトリウム35マイクログラム」というものがあります。この成分はゴキブリを殺すために用いられている、「ホウ酸」の主たる毒物です。こうした子宮頸がんワクチンを接種した世界中の多くの少女たちが、急性アレルギー症状、昏睡に陥り、中には死亡したりしているのです。子宮頸がんワクチンを接種したこと

をキツカケに、多くの少女たちが突然の失神、過呼吸、けいれん、歩行障害、握力が低下したためにペットボトルのふたが開けられなくなるなど、苦しい副反応と戦っているのです。

あるいは『米国ワクチン情報センター』という非営利団体の調査によって、「胎児の細胞」がワクチンの成分に使われていたことも明らかになっています。これも添付文書を読むと分かりますが、肉体的には健康であったが、精神的には病んでしまったために中絶することになった妊婦の胎児から、「MRC・5」というワクチンの原材料が開発されていたのです。

日本では1962年から「予防接種法」によって、学校生徒を対象にしたインフルエンザワクチンの集団接種が開始されました。しかし集団接種を行った学校と、行わなかった学校の冬の欠席率を比較した結果、「差はなかった」ために、1994年からインフルエンザワクチンの集団接種は廃止となりました。

では、果たして本当にインフルエンザワクチンを打つ意味があるのでしょうか？

2010年11月1日の『薬事日報』というサイトによれば、新型インフルエンザが世界流行した2009年、多くの人がインフルエンザワクチンを打ちましたが、日本ではなぜか133件の死亡例があったそうです。専門家は「死亡とワクチン接種との明確な関連が認められた症例はない」としています。しかし実は毎年、インフルエンザワクチンの接種後に、数名が亡くなっているのです。しかし専門家はこの事実を認めてはいません。元国立衛生院感染室長の母里啓子氏をはじめ心得ある医師たちが、子宮頸がんワクチンやインフルエンザワクチンは不要であると述べています。

1983年生まれの人、18歳までに24種類のワクチンを接種しますが、2016年生まれの人になると、わずか生後6ヶ月までに、24種類ものワクチンを接種させてしまいます。生後2ヶ月の検診で、8種類(B型肝炎、ロタ、DTP(3種混合)、ヒブ、ポリオ、肺炎球菌)のワクチン接種を受けています。しかもワクチンの同時接種の安全性は、実はまだ検証されていないそうです。

ある男性の娘さんは、三種混合ワクチンが始まった1989年に生まれ、1歳10か月になった時に、予防接種で「MMRWワクチン（三種混合）」を接種しました。するとその幼い赤ん坊は、ワクチン接種からわずか14日後に、思い脳症にかかり、自分では何一つできない身体になってしまったのです。父親の男性は言います。「無心に命の灯りをともし続ける娘の姿に励まされながら暮らしてきました。しかしあの時代、『MMRWワクチン』さえなかったらと残念でなりません。」

トランプ大統領も、ツイッターで次のようにつぶやいております。「健康な子どもが医者を訪れ、沢山のワクチンを大量に打たれ、体調を崩す。自閉症だ。なんと多くの症例がある事か！」と。あるいは2018年10月25日、『CDC』（米保険福祉センター）において、予防接種に関する委員会が開催され、看護師として20年勤務されたローリ・シミネリさんが、涙ながらにスピーチを行いました。

「私は地元の病院から引退したばかりです。私の同僚も、私自身も、誰もインフルエンザ予防接種の効果は信じてはいません。私は引退して良かったと思います。なぜなら今、こうして（CDCの）あなた方に話すことができるからです。私が働いていた時に同じことを話したら職を失っていたことでしょう。実際、多くの同僚が職を失いました。《中略》（ワクチンについて）私の10歳になる孫の例をあげましょう。当時、彼はとても健康な状態で、美しい2歳の子どもでした。その子がワクチンを受けて突然、重度の自閉症になってしまったのを私は見ました。」動画『元看護師「インフル予防接種は効果がなく有害」と政府委員会で発言』より

こうしたワクチンに関する事柄を見ていくと、ケネディJr.の「ワクチン接種はホロコースト（大虐殺）と同じ」という言葉に信ぴょう性が帯びてきます。そして今まさに、コロナを理由に人類全体がワクチンを接種する流れになっております。



人口を削減したい者たち

癌治療から精神医学、そしてコロナパンデミック、さらにはワクチンを見ていくと、医学の闇が見え始めてきます。そして医学の闇が見え始めると共に、この世界における邪悪な力を感じるはずで。そうです。実際にこの地球という星には、邪悪なる力が今も働いております。「ビーチを閉鎖することは狂気」と述べたジュディ・マイコヴィッツという優秀な女性科学者は、ドキュメンタリー映画『PLANDEMIC』の中で、次のように述べています。「世界の現状はパンデミックではない。フランデミックだ」と。

良いでしょうか？「今、人類を襲っているパンデミックが、実は計画されたものであった」と、科学者が科学的立場から勇気をもって述べているのです。もちろん彼らは、映画『PLANDEMIC』を偽情報として、消去しようとしています。しかしこのジュディ・マイコヴィッツこそ、「トランプ政権で必ずパンデミックが起こる」と予言して、トランプ大統領に様々なアドバイスを行って、アメリカを「ロックダウン」させたアンソニー・ファウチと真っ向から対決して、かつて5年も無実の罪で刑務所に入れられていた方です。

このジュディ・マイコヴィッツ博士を追いかけたドキュメンタリー映画『PLANDEMIC』は、すでに世界中で話題となっています。そして映画の中で、ジュディ・マイコヴィッツ博士は言います。

「犬や豚の血液には、元からコロナウイルスが入っている。そして牛や豚の血液をワクチンに入れる。

こうしたワクチンを2019年に中国やイタリアで、インフルエンザワクチンとして接種させていた。」

つまり武漢の「ウイルス研究所」から流出したと言われている新型コロナウイルスですが、マイコヴィッツ博士によると、コロナ入りワクチンもウイルス拡散に使用され、その発生源として中国のみならずイタリアもあるというわけです。彼女はさらに言います。「私の父も老人施設で肺炎で死んだが、ワクチンと医療体制の被害者だった。ワクチンにこんな恐ろしいものをひそませるなんて、なんて卑劣なんだろう」と。

では、この「パンデミック」を計画した者たちとは、果たして誰なのか？それを考えなければなりません。

スイスに本部を置くシンクタンク『ローマ・クラブ』は、1972年に第一回報告書『成長の限界』を出版しました。この書物の結論として、「温暖化」、「食料問題」、「エネルギー問題」などによって、すでに地球は限界に達しており、このまま人口が増え続けたら地球が持たない、としています。

そして『マイクロソフト』創業者のビル・ゲイツも、実はこの『ローマ・クラブ』の『成長の限界』と同じ思想を持っております。『聖書』の言葉に「悪魔も天使を偽装する」という言葉があり、あるいは『聖書』には、天使が墮天して悪魔になってしまう光景も描かれています。そしてこのビル・ゲイツという人物も、またこの世の欲望に侵されてしまったのか、いつしか思想的に病んでしまったところがあります。なぜならビル・ゲイツは、2010年の『TED』という番組の中で、「Innovating to zero」（ゼロへの革新）」という演台で、次のように語っていたからです。

「何よりも人口が先だ。現在、世界の人口は68億人である。これから90億まで増えようとしている。

そんな今、我々が新しいワクチン、医療、生殖に関する衛生サービスに真剣に取り組めば、（人類の人口を）およそ10〜15%は減らすことができるだろう。」

つまりビル・ゲイツ氏は「成長の限界を迎えたこの地球において、人類が地球温暖化問題を乗り越えていくためには、人間が排出するCO₂の量をゼロに向けていかねばならない。そのためには人類の人口を削減する必要がある、その人口削減計画の手段としてワクチンが有効であり、ワクチンを世界中の人が摂取すれば、自然な流れで人口を削減することができる」と明確に述べていたわけです。この彼のスピーチは、今でもネットでご覧になれます。

また2015年に『TED』に出演した時も、ビル・ゲイツは「もし次のアウトブレイクが来たら？私たちの準備はまだ出来ていない。1000万人以上の人が亡くなるような災害があるとすれば、それは核戦争ではなくウイルスである」と明確に述べていました。つまりビル・ゲイツは2015年の時点で、「パンデミック」が起

きることを予言していたわけです。この動画もネットでご覧になれます。

そして2019年10月18日、『ジョンズ・ホプキンス健康安全保障センター』という組織が、『WBF（世界経済フォーラム）』、『ビル・アンド・メリнда・ゲイツ財団』と共同で、ニューヨークにおいて、『EVENT 201』というものを開催しました。そのイベントの内容は、まさにウイルスの世界流行、パンデミックをシミュレーションしたものでした。この動画もネットで見れます。

ビル・ゲイツなど彼らは、パンデミックを計画していたのです。それは人類にワクチン接種を強制して、人口を削減するためです。それはもしかしたら、彼らなりの正義でもって行っている部分もあるのかもしれませんが。しかし彼らのその考えは間違いです。なぜなら本書では深く述べられませんが、人類は別のやり方で地球の様々な問題を乗り越えていくことができるからです。

『WHO』への拠出金が世界で一番多いのはアメリカですが、しかしトランプ大統領は、『WHO』から脱退することを表明しているために、アメリカが抜けた現在、『WHO』への拠出金が世界で最も多いのは、『ビル&メリнда・ゲイツ財団』です。そしてこの『ビル&メリнда・ゲイツ財団』こそ、インドやアフリカなどの世界中で、子どもたちにワクチン接種を行って、数十万もの子どもたちを弛緩性麻痺にしてきたのです。

たとえばインドの『聖ステイブンス病院』の小児科医ネートウ・バシシュト博士とヤコブ・プリエル博士が、『WHO』と『ビル&メリнда・ゲイツ財団』を激しく批判しております。この二人の博士によれば、インドでは非ポリオ急性弛緩性麻痺 (NPEP) の症例が増しており、その麻痺の原因を辿っていくと、ビル・ゲイツが慈善家の素振りを見せて贈っていたポリオワクチンが、頻繁に投与されていたことが明らかになったのです。インドでは約50万人もの子どもたちが麻痺になってしまい、すでに医師たちはビル・ゲイツを訴えております。こうした事実はロシアの国営放送でも報じられました。

信じ難いことは重々、承知です。しかし実は今、世界で起きている「パンデミック」は計画されていたもので

す。その目的は経済を破壊することで、世の中から中産階級を無くして、貧困層と超富裕層のみを残した「ハイパー格差社会」を築き上げると共に、「パンデミック」の解決策としてワクチン接種を強制的に推し進めて、そして『成長の限界』と「地球温暖化」を大義名分にして、「人口削減」を行っていくことです。

チップ埋め込みは始まっている

米国の大物弁護士ダーショウィッツという人物は言います。「どうしても嫌ならワクチンを打たなくてもいい。その代わりに外出の自由はない」と。2020年5月、ビル・ゲイツも「誰がワクチンを接種したのかを示す、何らかのデジタル証明書を手にするようになる」と明確に述べています。

すでに今現在、マスクをしていないとデパートにも入れように、このマスクに代わって「ワクチン接種電子証明書」が登場するのかもしれませんが。数年後、もしもワクチン接種をしていない人がデパートに入ったら、顔認証システムと監視カメラによって即座に発見され、警報が鳴って、係員に連行されてしまうかもしれません。

そして「ワクチンを打たない者は連行される」、もしもそんなことが日常的になったら、それこそワクチン接種の強制が法制化されて、ワクチンを打たない者はただ外を歩いているだけでも、監視カメラ・顔認証システムによって警報が鳴り、警察に連行されてしまう時代さえ来てしまうかもしれません。

ジョージ・オーウェルが描いたデストピア社会小説『1984』、この小説で描かれる世界は、「ビッグ・ブラザー」と呼ばれる独裁者に支配された全体主義国家であり、市民の思想や言動には厳しい規制が加えられており、巨大なスクリーンで常に監視されていました。それはまさに『新約聖書』の『ヨハネの黙示録』で予言されていた時代です。

『ヨハネの黙示録』とは、7つの封印が解かれ、7つのラップが鳴って計画が動き、7つの鉢の中にあるもの

が地に流されて、神の裁きが訪れるという予言の書です。

「第三の御使が、ラツパを吹き鳴らした。

すると、たいまつのように燃えている大きな星が、空から落ちてきた。

そしてそれは、川の三分の一とその水源との上に落ちた。

この星の名は『苦よもぎ』と言い、水の三分の一が『苦よもぎ』のように苦くなった。

水が苦くなったので、そのために多くの人が死んだ。」

————『ヨハネの黙示録』8章10-11節

「ニガヨモギ」はロシア語で「チェルノブイリ」であり、たしかに「チェルノブイリ」によって多くの人間が亡くなりました。

そして『ヨハネの黙示録』にはこうも記されております。

「この刻印のない者は皆、物を売ることも買うこともできないようにした。

この刻印はその獣の名、またはその名の数字のことである。

ここに知恵が必要である。賢き者は獣の数字を解くがよい。

その数字とは人間であり、そしてその数字は666である。」——『黙示録』第13章17-18節

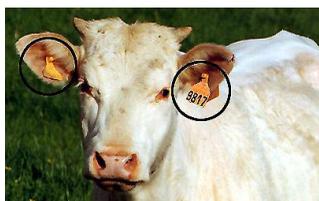
さて、『ヨハネの黙示録』が述べる「獣の数字666」とは何を意味し、誰を指しているの

でしょうか？

大きな牧場で牛を管理する場合、牛の耳にバーコード入りのタグを着けるよくことがあります。

そしてこれとまったく同様なことが、実は今、「マイナンバー制度」と共に人間にも始まろうとしております。

すでに体の中、特に手にチップを埋め込んで、そこに内蔵されたバーコードを読み取って、ド



アのセキュリティロックを解除したり、自販機で買い物したりすることが、企業単位で行われております。自動販売機用のソフトウェアを開発している米ウィスコンシン州の『スリー・スクエア・マーケット』も、「マイクロチップ」を人体に埋め込む技術を社員に提供しています。

マイクロチップを体内に埋め込んだ人は、社内では手をかざすだけで様々な部屋に入退室することができて、自販機も使え、コンピューターにログインすることもできます。あるいはスウェーデンでは、すでに国家規模で、「体内埋め込み型マイクロチップ」が利用され始めています。『スウェーデン鉄道』は世界で初めて、乗客の体内に埋め込まれたマイクロチップを、乗車券の代わりに利用できるシステムを2017年5月から導入しております。

トランプ大統領が中止にしましたが、オバマ元大統領が推し進めていた「オバマケア」も、実は米国民にチップを埋め込むことが、密かな目的として入っていたようです。この「オバマケア法案」は3千ページを超える法案であり、しかも補足条項を加えると2万ページにもなるために、なかなかすべてを把握することは困難です。しかし米国市民のリンゼイ・ウィリアム氏は、「オバマケア」の分厚い議案書の中に、とんでもない条項がひそんでいることに気づきました。彼は言います。

「1014 ページ目の『HR 4872 法案』をご覧ください。『National Medical Device Registry』という部分に書かれています。これによればクラス2のデバイスをインプラント可能と書いてあります。」
つまり3万ページもあるために、ほとんどの米国民が見落としていたわけですが、「オバマケア」の1014 ページには、こっそりと「チップ埋め込み」という文言が記載されていたわけです。

「バーコード」というものは、黒線の種類、太さによって数字を表現しており、その数字の組み合わせを読み取っています。そして流通商品に必ず付いているバーコードとして、通称「商品バーコード」というものがあり



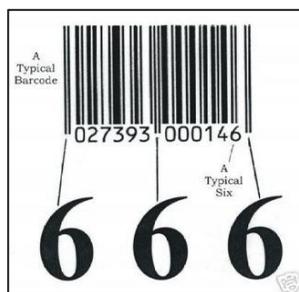
ます。これは日本では「JANコード」、世界では「EANコード」と呼ばれ、広く流通されている商品には、必ずこのバーコードが付いています。

そして「図書コード」のような特殊なバーコードではなく、すでに世界で使用されている「商品バーコード」には、実は必ず「666」という獣の数が入っています。「666」の数字そのものは明確には記されておりませんが、「商品バーコード」には、左右の両端と真ん中に「6」を現している同じ太さの2本の黒線が必ず記されているのです。図を見てみると分かりますように、「6」を現す数字は同じ太さの棒線が2本です。そして「JANコード」や「EANコード」には、この「6」を現す棒線2本が、かならず左右両端と真ん中に在るわけです。

つまりどうやら悪魔勢力は、『ヨハネの黙示録』という予言書にもあるように、「666のバーコード入りチップを埋め込まない刻印無き者は、物を売ることも買うこともできない」、そんな新たな社会秩序を築こうとしているようです。

『スペースX社』という巨大企業は、2018年の初めに、国家規模に匹敵するほどの「ロケット打ち上げを成功させました。この『スペースX社』と『テスラモーターズ』を営むイーロン・マスクという人物も、どうやらビル・ゲイツと同じような思考の人物で、あちら側の勢力の人間です。彼は「人間の脳にチップを入れる日も近い」と語っています。つまり彼らは、人口を減らすだけでは飽き足らず、私たちの脳にチップを埋め込むことで、私たちの思考まで管理、監視したいわけです。

これは『Facebook』のCEOマーク・ザッカーバーグが現在、開発に取り組んでいる「脳から考えをダイレクトに出力するシステム」と同じ目的です。イーロン・



マスクによれば、「この脳のチップ導入を、レーシック手術くらい手軽で、安価なものにしたい」と語っています。イーロン・マスクは言います。「来るべき未来を生き残るために人間をサイボーグ化する必要がある。」と。

ユダヤ人を自称する悪魔教徒

ビル・ゲイツは、人口を削減するための単なる駒にしか過ぎず、その背後、つまり奥の奥に本当の黒幕がいます。なぜならビル・ゲイツは私たち一般庶民からすれば大金持ちですが、本当の黒幕からすれば単なる小金持ちに過ぎないからです。

では、パンデミックを起こして、ワクチン接種を強制させて、人口を削減して、我々にチップを埋め込んで、超管理社会を築かんとしている者たちとは、果たして誰なのでしょう？

その謎を解くためには、『新約聖書』の予言の書『ヨハネの黙示録』に、今一度、目を向ける必要があります。「あなたの見た獣は、昔はいたが、今はおらず、そして、やがて底知れぬ所から上つてきて、ついには滅びに至るものである。」

地に住む者のうち、世の初めから、いのちの書に名をしるされていない者たちは、この獣が、昔はいたが今はおらず、やがて来るのを見て、驚きあやしむであろう。《中略》

昔はいたが今はいないという獣は、すなわち第八のものであるが、またそれは、かの七人の中のひとりであつて、ついには滅びに至るものである。」「『ヨハネの黙示録』十七章

この中で言う「かの七人の一人」とは、「七天使」としての一人で「ルシフェル」と呼ばれていましたが、神に嫉妬して、墮天して、地獄に堕ちたために、「エル」の名を取られ、「ルシファー」と呼ばれている悪魔のことです。

『旧約聖書』の『イザヤ書』には、天使が墮天していく光景として、こう記されており。

「ああ、お前は天から落ちた、明けの明星（ルシファー）、曙の子よ。

お前は地に投げ落とされた、もろもろの国を倒した者よ。

かつて、お前は心に思った。

『わたしは天に上り、王座を神の星よりも高く据え、神々の集う北の果ての山に座し、雲の頂に登って、いと高き者のようになろう』と。

しかし、お前は陰府に落とされた、墓穴の底に。

お前を見る者は、まじまじと見つめ、お前であることを知って、言う。

『これがかつて、地を騒がせ、国々を揺るがせ、世界を荒れ野とし、その町々を破壊し、捕らわれ人を解き放たず、故郷に帰らせなかつた者か。』 『旧約聖書』イザヤ書（14・12～17）

ルシフェルは嫉妬によって地獄に堕ちました。しかも単に、地獄に堕ちて自分一人が苦しんだだけではありません。その当時、人間として生きて悪をなした者たちが、浅い地獄界をつくり始めていましたが、この墮天使ルシフェルは、サタン、悪魔として地獄界に下りて以降、天界に向かつて戦いを挑み始めたのです。

そして信じがたいことですが、人口削減を行ってチップを埋め込みたい者たちというのは、悪魔崇拜を行っている悪魔教徒なのです。世界には、キリスト教徒22億人、イスラム教徒16億人、ユダヤ教徒1500万人、仏教徒5億人がおり、日本にも神道という八百万の神々を信仰する日本民族独自の宗教があります。ですから世界人口73億人の大半の人が、何らかのカタチで神仏を信仰しております。

しかし驚くべきことに、現在のイラクやクウェートの辺りで、「シムメール」とも呼ばれていた土地において、太古の昔のバビロニア時代から今も続いている悪魔教が、実は世界には存在していたのです。

『旧約聖書』に記されているように、紀元前9世紀に預言者エリヤは、「バアル」という神を崇拜する450

人の者たちと戦いましたが、この「バアル」というのは悪魔でした。今から約三千年前において、バアル崇拜を行う悪魔教徒がいたわけですが、そうした悪魔の系譜は残念ながら密かに現代にまで続いてきたわけです。

もし、「悪魔教徒なんて信じられない」と言うのであるならば、一見は百聞に如かず、『天使VS悪魔』悪魔教徒は存在する』という動画をご覧になれば分かります。そして『ヨハネの黙示録』3章9節にも、「悪魔教徒が終末の時代に現れる」ということが、はっきりと予言として書かれてあります。

「見よ、サタン（悪魔）の会堂（教会）に属する者、すなわち、ユダヤ人と自称してはいるが、その実ユダヤ人でなくて、偽る者たちに、こうしよう。

見よ、彼らがあなたの足もとにきて平伏するようにし、そして、わたしがあなたを愛していることを、彼らに知らせよう。」

つまり『ヨハネの黙示録』には、はっきりと「ユダヤ人を自称する悪魔教徒」が存在していることが記されているわけです。そして実際にアメリカでは、家の外ではユダヤ教徒の素振りを見せておきながら、実際は悪魔崇拜を行っている者たちが大勢おり、そうした内部告発者の映像なども、今ではネットで見ることができます。

タブー中のタブーの話ですが、有色人種系のスファラディ・ユダヤ人ではなく、ユダヤ教徒に改宗した白人種系のアシケナージ・ユダヤ人の中には、実はユダヤ教徒の素振りを見せておきながら、本当は悪魔教徒である偽物のユダヤ教徒がいるわけです。

かつて今から約三千数百年前、エジプトで奴隷にされていたユダヤ人たちは、モーセによって解放されて、長い旅の末に現在のイスラエルの地に辿り着きました。この旅の中のモーセの教えが、ユダヤ教となりました。そして紀元前6世紀になると、ユダヤ人たちはまた捕えられて、バビロンを初めとしたバビロニア地方へと連れ去られてしまいました。これを「バビロン捕囚」と言います。するとユダヤ教徒たちは、バビロニアの悪魔教徒の影響を受けて、ユダヤ教の祖であるモーセの教えを忘れて、『バビロニア・タルムード』という独自の教えを作

つてしまったのです。

それを証明する人物がマルチン・ルターという方です。16世紀になると、宗教改革者のマルチン・ルターという方が現れて、彼はキリスト教カトリック教会と対決して、「プロテスタント」というキリスト教の宗派を作りました。そのカトリックとの戦いの中で、ルターは『新約聖書』をドイツ語に翻訳しようと、ヘブライ語を勉強し直したのですが、その際、彼は『旧約聖書』と共に『タルムード』を紐解いてみました。するとルターは絶句したのです。なぜならモーセの教え『旧約聖書』では、「偽ってはならない、盗んではならない、殺してはならない」と教えられているというのに、『タルムード』では「ユダヤ人のみが人間であり、ユダヤ人以外はゴイであり、ゴイには偽るべきであり、盗むべきであり、殺すべきである」と書かれていたからです。「ゴイ」とは「家畜」という意味です。複数形になると「ゴイム」と言います。

仏教では、生きとし生ける者すべてが尊い存在であり、すべての人に悟りの可能性、つまり「仏と同じ性質」、すなわち「仏性」があると説いており、それが真理です。ですからこの『タルムード』が説くこの「家畜思想」は、明らかに真理に反した考え方です。300冊以上の小冊子を書いたドイツの英雄マルチン・ルターですが、彼は人生最後の小冊子として、『ユダヤ人と彼らの嘘』を書き、こうして彼は『タルムード』の家畜思想を暴きました。

1489年、フランスの国王がキリスト教を「国家としての宗教」、つまり「国教」にするために、ユダヤ人たちにキリスト教への改宗を迫りました。もしもユダヤ人がこの要求を拒めば、フランスから追放され、家や土地などの不動産は捨てなければならなくなりました。するとコンスタンチノーブルのユダヤコミュニティから、フランスのマルセイユにあるユダヤコミュニティへと一通の手紙が届きました。手紙を書いたのは、ユダヤ教の総主教のウススという人物でした。ウススはユダヤの同胞に向けた手紙の中で、こんな恐ろしいことを述べていたと言われています。

「モーセに従う親しい同胞たちよ。汝らの報告によるとフランス国王が、汝らにキリスト教に改宗せよと強制しているそうだが、やむを得ぬ、改宗せよ。ただしモーセの律法は決して忘れては成らぬ。

彼らは汝らの財産を奪うとの事だが、されば汝らの子を商人に育て、将来はきつとキリスト教徒たちの財産を身ぐるみ巻き上げるがよい。また、汝らは生命も危険にさらされているというが、それなら何時らの子どもらを医者や薬剤師に育てて、いづれ彼らの生命を奪うがよい。

ユダヤ教の神殿の破壊に対しては、子どもらをキリスト教の神父にし、やがてキリスト教会を破滅に導く事だ。その他、様々な圧迫が知らされているが、汝らの子どもらを弁護士や公証人にして、あらゆる問題に介入させねばならぬ。」

この「ウスの手紙」が本物なのかどうか、それは定かではありません。しかしこの手紙は、「汝、殺すなかれ」、「隣人について偽証してはならない」という『モーセの十戒』に違反するものであり、『タルムード』の思想が垣間見えます。そしてこのウスの手紙の中で、「キリスト教に改宗したフリをして、医者や薬剤師となつて命を奪え」と述べていることも見逃せません。そして実際にヨーロッパでは、キリスト教に改宗したフリをする隠れユダヤ教徒が「マラーノ」と呼ばれて、キリスト教徒たちから迫害を受けてきたのも事実です。「マラーノ」とは「豚」という意味です。そしてマルチン・ルターも、『ユダヤ人と彼らの嘘』の中で、次のように述べています。

「もし彼ら（ユダヤ人）が我々全員を殺戮する事ができるなら、彼らは喜んでそうするでしょう。事実、彼らが多く、特に外科医と医者であるとか称している者達は、キリスト教徒を殺害しているのです。彼らは一時間、あるいは一カ月で死をもたらす毒を人々に与え、どのように薬を扱ったらよいのか熟達しているのです」

ウスの手紙が真実のものかどうか定かではありませんが、しかしその手紙の内容は、ルターが人生最後に記した小冊子の内容と一致しているのです。どうやらルターは、「ユダヤ人は邪悪である」と考えていたようです

が、しかしそれは時代的な制約があったからであり、真実はユダヤ人を自称している悪魔教徒こそが邪悪なのです。

ですから「プランデミック」を行っている者、あるいはこれに加担している者たちは、けっしてユダヤ人ではなく、あくまでもユダヤ人は加害者ではなく被害者です。しかしながらルターの言葉を紐解くと、ウスの「キリスト教徒に改宗したフリをして、医者や薬剤師となって人々の命を奪え」という言葉にも信ぴょう性が帯びてきます。そして実際に今現在、抗癌剤や向精神薬、そして多くのワクチンが人の命を救うフリをして、多くの人の命を奪っております。

もちろん医療は、人間を不健康から健康へと誘ってくれる大切なものです。しかし医学には問題があることも事実です。そのために医師にして、科学者であるジュディ・マイコヴィッツは、映画『PLANDEMIC』の中で、医療に従事する人たちに対して次のように述べています。

「自分を許してあげて欲しい。我々はベストを尽くして研究し、真実だと思って（医学を）学んだのです。

しかし真実だと言われていたデータが、そうではなかったことです。我々が学校で教えられてきたことは、まったく科学ではありませんでした。（権力者たちの）言われた通りにしないと、資金も得られません。論文も公開できないのです。」

彼ら悪魔教徒たちというのは、『BIS』という世界銀行を営むことで、『日銀』、『FRB』、『ECB』、『インランド銀行』といった「通貨発行権」を持つ各国の中央銀行を管理し、さらに彼らは、「BIS規制」によって、中央銀行の下にある市中銀行、つまり『みずほ』、『三井三菱UFJ』などといった銀行も管理下に置いています。そのために彼らに残されている欲望といたら、「人の子を喰らって生き血をすすす」といった狂った悪魔的欲望か、あるいは「人類を支配したい」といった悪魔的支配欲くらいのものです。

つまり彼らの野望とは、経済を破壊して、人口を削減して、「超格差監視家畜社会」を築いて、自分たちに都



合の良い世界秩序、「新世界秩序」を築くことです。「我々の計画に同意せよ」、「新世界秩序」といった文言は、「世界の基軸通貨」とさえ言われる1ドル紙幣にも明確に書かれております。しかしラテン語であるために、未だに世界中の人々が、この事実気づいておりません。彼らは、我々のことを「家畜」として完全にバカにし切っているために、こうしたことを平然とやってくるのです。

彼ら悪魔教徒が『国連』と作り、『EU』も作り、『WHO』をも作っているために、いつまで経っても世界の問題は解決するどころか、むしろ年々、複雑化しているのです。「いくら何でも信じられない」と思うならば、『BIS』と『EU』のビルを見ると分かります。どう見てもバベルの塔をモチーフにしています。

そして報道を見ても分かるように、『WHO』と『中国共産党』はとも仲良しです。中国・武漢発の新型コロナウイルスであり、これだけ世界にウイルスが拡散してしまった事実を見ても、誰の目にも中国共産党政府のコロナ対応には目にあまるものがありました。しかし『WHO』は中国共産党を常に称賛し続けてきました。

なぜなら「共産思想」の生みの親であるカール・マルクスがユダヤ人を自称していたように、人々を「家畜」と見なす『タルムード思想』と、「人間は物」と考える『共産思想』は、とても思想的に愛称が良いからです。悪魔教徒たちからめとられていたアメリカのオバマ政権が、武漢の「ウイルス研究所」を資金援助して、常に親中政権であったように、悪魔教徒たちと中国共産党というのは、常に協力体制を保ち続けているのです。



そして私たちのことをバカにし切る彼らは、ジョージア州にわざわざ石碑まで建てて、自分たちの計画内容を私たちに明らかにしています。その石板を『ジョージア・ガイド・ストーン』といいます。この『ジョージア・ガイド・ストーン』の石板には、英語、ヘブライ語、中国語などの8つの言語からなり、そこに人類に対する恐ろしいメッセージが刻まれております。

「1、大自然と永遠に共存し、人類は5億人以下を維持する」
すなわち彼らは、「家畜」と考える人類の人口を10分の1以下に減らそうとしているわけです。なぜならそれが彼らにとつて都合の良い管理し易い人数だからなのです。

5Gとスーパーシテイの危険性

では、どのようにに彼ら悪魔勢力は、超格差監視家畜社会を築こうとしているのでしょうか？

科学者ジュディ・マイコヴィッツは言います。

「（コロナウイルスが入ったワクチンの次は）5Gです。（5Gの）160GHzの周波数は、鉄からヘモグロビンを分離する。すると鉄が血液に、フェリチンとして放出され、フェリチンレベルが3000以上になる。そしてサイトカインストームが起こる」

科学的専門用語が並び、とても難解です。彼女の言葉を簡単に説明いたしますと、5Gとは「第5世代移動通信システム」のことで、4Gよりも格段に性能が向上したシステムのことです。5G以降することによって、これまで数十分かかっていた動画のダウンロードが、わずか数秒で出来るようになります。2020年から日本国内でもサービスを開始しています。

しかし電子レンジが発する電磁波が、人体にとって良くないことはすでに広く知られているように、5Gの間



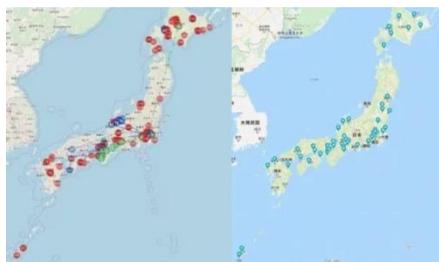
題は電磁波です。スイスでは5G用アンテナから出る電磁波が、健康に悪影響であると全国的な反対運動が広がり、スイス連邦環境庁が調査結果を発表するまで、5Gアンテナの一時停止を求める決議を採択しています。2019年3月の時点で、世界35カ国の180人以上の科学者と医師が、5Gの普及の一時停止などを求める声明を欧州委員会へ送っています。

科学者ジュディ・マイコヴィッツ氏によれば、どうやら高性能の5Gアンテナが発する160Hzの電磁波は、私たちの体に「サイトカインストーム」という現象を起こしてしまうそうです。「サイトカイン」とは、私たちの肉体の細胞から分泌される物質のことです。この「サイトカイン」という物質は本来、ウイルスや細菌などから私たちの健康を守ってくれる大切な物質だそうです。ウイルスや細菌が体内に入り込むと、健康を守るためにこの「サイトカイン」という物質が体内で分泌され、すると発熱、倦怠感、頭痛などが起こり、肉体に異常が起きていることを知らせてくれます。

しかしこの「サイトカイン」という物質が、暴走して分泌し続けてしまうことがあります。それが「サイトカインストーム」であり、5Gアンテナが発する電磁波が、この恐ろしい現象を引き起こしてしまうと、科学者ジュディ・マイコヴィッツは言うわけです。

そして地図を見ればお分かりのように、実際に日本でも、世界でも、「コロナ感染者が出ている地域」と「5Gアンテナが設置されている地域」は、見事なまでに一致するのです。

しかも型コロナウイルスに感染しても、患者の約9割は軽い風邪程度の軽症ですが、中には39℃以上の高熱や筋肉痛などの症状が出ることもあり、回復するのに1週間ほどかかる場合があります。その一方で、ごく稀に肺炎の症状がひどくなって呼吸困難に



お陥り、死亡することもあります。この場合、「サイトカインストーム」が起こっている可能性があるわけですね。

私たちがマスコミに踊らされて、コロナを恐怖して、マスクをして出かけている今も、5Gアンテナは日本および世界中に設置され続けています。単純に言って、5Gアンテナを都会の街中に設置しまくるということは、街という街を「微弱な電子レンジ」へと変えてしまう可能性があるわけです。しかし電子レンジでお弁当や冷凍食品を温めるのは、わずか数十秒から数分で済みますが、「微弱の電子レンジ」と言っても私たちはそこに住み続ける以上、5Gアンテナを設置しまくることが、いかに危険であるかが分かるはず。もはや5Gアンテナをやめるか、田舎に逃げるしか道はないのです。ちなみにいつの間にか電力メーターがスマートメーターに変えられていることがよくありますが、これは5G

を使用しているものです。ですから電力会社に電話して、従来の電力メーターに戻してもらったほうが良いでしょう。

つまり簡単にまとめますと、ジュディ・マイコヴィツという科学者は、「イタリヤではコロナウイルスが混入したインフルエンザワクチンが大勢の人に打たれている。そして5G（アンテナ）がサイトカインストームを起こす引き金になっている」、と主張しているわけです。それが映画『PLANDÉMIC』の中で、彼女が主張していることです。

すでに述べましたように、ウイルスや細菌の病原体を調べるステップとして、「コッホの4原則」というものがあり、大橋眞徳島大学名誉教授によれば、まだ「第一ステップ」さえ、新型コロナウイルスの研究は超えていないそうです。にも関わらず政府は「新生活様式」などということを行い始めて、「オンラインで帰省」、「買い物は通販」、「飲食は宅配」、「仕事は在宅」、「飲み会はオンライン」、「会話はマスク着用」などと、訳の分からない



ことを言い始めました。それはまさに人と人を切り裂くものであり、家族や友人、仲間の絆を壊さんとするものであり、そして悪魔が喜ぶことです。

今の政府も、マスコミも、すでに悪魔の手先と言えるでしょう。

そして国民の目がコロナに集中している4月、5月に、日本では「スーパーシティ法案」が衆参両議院でスピード可決されました。「スーパーシティ」とは、①(人工知能)とビッグデータを活用して、自動運転、キャッシュレス、オンライン医療、オンライン教育などを実現させた「未来都市」のことです。この法律は、令和2年6月3日に公布され、公布から3か月以内に施行されます。つまり9月3日までに、「スーパーシティ構想」は開始するわけです。

2020年3月18日の「国家戦略特区諮問会議」では、「スーパーシティ構想」の資料として、中国の杭州市が例に出されています。この杭州市では市内の43%をカバーする4千台超の監視カメラが設置されており、何らかのトラブルがあれば、AI(人工知能)が約20秒という速さで警察に通報します。また杭州市のコンビニは、すでに無人化し、キャッシュレスとなり、PASMOやスマホすらも必要とせず、商品をレジに運んで顔認証すれば支払い可能です。ホテルもルームキーは不要で、自分が宿泊している階しかエレベーターは止まりません。

こうした顔認証と監視カメラが行き届いた中国・杭州市をモデルに、今、日本政府は「スーパーシティ構想」を進め、そして「スーパーシティ」を現実のものにするために、5Gアンテナを街中に設置しているわけです。まさにこのまま時代が進めば、「刻印無き者は物を買うことも、売ることでもできなくなった」という時代になっ
てしまうでしょう。

「チップ入りワクチンの接種」が法制化されて、刻印無き者は警察に連行されてしまう時代さえ来てしまうか

人との接触を6割減らす、10のポイント 参考資料1

緊急事態宣言の中、誰もが感染するリスク、誰でも感染させるリスクがあります。
新型コロナウイルス感染症から、あなたと身近な人の命を守るため、日常生活を見直しましょう。

1 ビデオ通話で オンライン購書	2 スーパーは1人 または少人数で すいている時間に 行く	3 ジョギングは 少人数で 公園はすいた時間、 場所を避が
4 待てる買い物は 通販で	5 飲み会は オンラインで	6 診療は遠隔診療 定期服は問合を依頼
7 筋トレやヨガは 自宅で動画を活用	8 飲食は 持ち帰り、 宅配も	9 仕事は在宅勤務 業務会議、オンライン 会議などにより接触を減らす
10 会議は マスクをつけて	3つの原則 守りましょう 1. 感染の強い場所を避ける 2. 多数の人以上の密集場所 を避ける 3. 密着して会話や飲食を するのを避ける	

手洗い・
咳エチケット・
換気や、健康管理
も、同様で重要です。

もしれません。そして私のように「パンデミックはプランデミックだ」などと述べていたら、精神病院に入れて、薬漬けにされて、拘束されて、電気ショックをされて、廃人にされてしまうかもしれません。まさにジョージ・オーウェルが描いたデストピア小説『1984』は遠い未来の話ではありません。

悪魔の手先となった日本政府

しかしなぜ、こんな危機の時代になってしまったのでしょうか？

先の大戦で日本が敗れると、占領軍が日本にやってきて、多くの日本人が戦犯として、「巣鴨拘置所」という所に入れられました。そしてその巣鴨拘置所で東條英機が処刑された翌日の1948年12月24日のクリスマス・イブ、岸信介という人物がCIA工作員として釈放されました。「岸信介がCIA工作員であった」、これは変えることのできない歴史的事実です。なぜならすでにアメリカが公式文書で認めてしまっているからです。

ちなみにクリスマスは、イエスの誕生日とされておりますが、神に刃向かってバベルの塔を建設したニムロデの誕生日という説もあります。それが事実ならば、キリスト教もかなり初期の頃から、悪魔に汚染されていることとなります。もしかしたらこのニムロデこそ、かつて七大天使の一人であった「ルシフェル」が地上に転生して、その後、地獄に堕ちたルシファーなのかもしれません。

そしてかつて巣鴨拘置所があったその場所に、『サンシャイン60』は建てられました。意味は「太陽の光」であり、悪魔崇拝者たちは価値観が逆転しており、「光を闇」とし、「闇を光」としております。そして「6」という数字は悪魔が好む数字です。

そしてルシファーを「神」と考える悪魔勢力、この勢力によって長らく牛耳られてきたCIA、その工作員であった岸信介、その孫である安倍晋三によって、今まさに「コロナ」を理由に悪魔の時代を築かれようとしてい

るわけです。

ちなみに日本の選挙の9割を取り仕切っている会社は、『株式会社ムサシ』という会社です。この株主には安倍総理の父である安倍晋太郎がおり、すでに亡くなっているので息子の安倍晋三に株は引き継がれている可能性は高いでしょう。そしてこの会社の株主をずっと追っていくと、幾つものダミー会社を経由して、『フォートレス・インベストメントグループ』という外資系の会社に辿り着きます。日本の選挙の9割を取り仕切るのは外資であり、つまり彼らなのです。

広告代理店からテレビや新聞といったマスコミをお金で牛耳っているのも彼ら悪魔勢力であり、テレビや新聞に良く登場する人物が選挙に勝つシステムになっております。そして票を数える「集計マシン」には、インターネットから侵入できる「バックドア」があることも、すでに不正選挙裁判の中で明らかになっていきます。ですから「すでに日本の選挙は悪魔の手の中にある」というのが、悲しき真実です。ソ連の独裁者スターリンが述べた「票を投じる者が決めるのではなく、票を数える者が決める」という言葉を、一刻も早く日本人は深く考える必要があります。

では、「コロナ」とはいかなる意味があるのでしょうか？太陽の最外層で、皆既日食の際に、太陽の周りを取り巻く、真珠色に淡く輝く黒い希薄なガスのことを、実は「コロナ」と言います。

闇を太陽と考える悪魔勢力が、「コロナ」という名の毒ガスにも似たウイルスによって、経済を破壊して、新生活様式で人と人が団結することを防ぎ、大衆が歯向かえないようにして、「家畜」と見なす我々にワクチン接種を強制して、人口を削減すると共に、とてもつもない監視社会を築こうとしている、それが現在の世界の状況です。それはまさに「ビッグ・ブラザー」に支配されたデストピア社会小説『1984』そのものであり、AI（人工知能）とビッグデ



トタによって、こうしている今も着々と時代は悪しき方向に向かつております。

そしてお金と名誉を与えられるその代わりに、悪魔の手先として操り人形と化しているのが、安倍総理であり、小池都知事であり、「スーパードクター構想」が進む今、その他の多くの政治家にも、もはや期待はできません。

「うつ病キャンペーン」、「発達障害キャンペーン」が行われたことで、約420万人の精神疾患に悩むに日本人がおり、精神医学の闇が未だに知られていないのは、日本の政府および厚生労働省、そして地方自治体が、実は精神医学と結託してきたからです。だから「発達障害支援法」などという法律が出来て、「早期発見」などと称して、子どもたちが「発達障害」と次々と科学的根拠を持たずに診断されているのです。その結果、日本は「発達障害バブル」となり、「発達障害大国」となり、いつしか「ビバンセ」という脱法覚せい剤まで認可されたのです。「まさに悪魔の所業」と言えるでしょう。

そして日本や世界で「精神医学」を流行らせてきたのは、おそらくは悪魔勢力です。なぜならそれは、精神医学の理念とも、目的とも言えるものを見れば分かるからです。1940年代に『世界精神保健連盟』という組織が誕生し、この組織は『WHO』の中にも入り込んでいます。この会長にブロック・シチョルムという人物がいました。この人は「共産主義者であった」とよく言われていますが、「共産主義者」というよりも、むしろ「タルムード主義者であった」と考えるべきでしょう。そしてこのブロック・シチョルムという人物は、『世界精神保健連盟』の初代会長として講演を行い、7つの目標を掲げました。

「第1 憲法の破壊

第2 国境の破壊

第3 誰でも拘束できる社会

第4 合法殺人の権利

第5 すべての宗教の撤廃

第6 性道德の破壊

第7 学校での薬物常用によって未来のリーダーを奪う

この悪魔的も言える7つの項目は、1943年にホワイトハウスで行われた講演記録により、公式に残っている記録であり、音声記録も存在しています。

「憲法の破壊」は、日本が先の大戦に敗れたことによって、これまで行われてきたことです。「国境の破壊」は、悪魔教徒グローバルリストによる「TPP」と、あるいは中国共産党が行っている「一带一路」などです。一方で彼らと戦っているトランプは、アメリカの国境に壁を建設しております。「誰でも拘束できる社会」は、精神医学の流行と精神病院の設置によって実現しつつあり、もしもこのままワクチン接種の電子証明書所持が義務化されたら、完全に完成すると言えるでしょう。「合法殺人の権利」、これはまさに新世界秩序の家畜社会の完成であり、まだここまでは到達していません。「すべての宗教の撤廃」は、悪魔教徒たちが精神医学を駆使して、今なお行い続けていることであり、日本でも神社仏閣が廃れつつあります。「性道德の破壊」は、宗教が廃れさせられ、これによって道徳が破壊され、モラルハザードが起こること、今なお行われ続けていることです。「学校での薬物常用によって未来のリーダーを奪う」とは、精神医学の立場からすると、坂本龍馬やエジソンなどの偉人たちは皆、「発達障害」に値するそうですから、今なお日本の小中学校で、「発達障害の早期発見」、そして「向精神薬の処方」という形式で行われていることです。

まさに精神医学の目的そのものが悪魔的なのです。表現を変えれば、精神医学が悪魔教という見方さえできます。そして先に敗戦以降、徐々に悪魔勢力の手先と化してきた日本政府は、日本で「精神医学」を流行らせていくことによって、「うつ病」と「発達障害」を増やすかたわらで、日本の精神をも破壊してきたわけです。

アメリカやヨーロッパでは、「ロックダウン」の反対のデモが始まっております。あるいはドイツでは一時期、ワクチン強制接種の法整備が決まりましたが、しかしドイツ国民が立ち上がることによって、ワクチンの強制接

種は無くなりました。しかし日本の精神が破壊されたからなのか、日本だけは未だに無関心の人が多い状況にあります。そのために世界では「キル・ゲイツ」とまで呼ばれ始めているビル・ゲイツに、この2020年の春、「旭日大綬章」という日本で最も榮譽ある賞を贈ってしまっている最悪の事態となっております。すなわち日本人が眠っているわけであり、日本の精神が眠らされているのです。

2020年4月上旬から始まった「緊急事態宣言」によって、多くのお店が閉店し、会社は倒産し、経済は破壊されましたが、政府は今、自粛・休業要請に従わない個人や企業に対して、罰則を設ける方向で法律の整備を始めております。それはつまりコロナの第2波、第3波が予測されている現在ですが、この日本でも「ロックダウン」が十分に予測されている、ということですよ。ちなみに東京都新宿区では、新型コロナウイルスに感染した区民に対して、「一人当たり十万円を支給していることもあってか、感染者が激増しております。これを受けて小池都知事は、「若い方が感染している」、「夜の街関連が一定数を占めている」と語っています。壊された精神を立て直さないと、本当に「ロックダウン」がやって来てしまうかもしれません。

志村けんと岡江久美子の死

さて、日本における「コロナパンデミック」を考える時、どうしても忘れてはならない二人の有名人がおります。志村けんと岡江久美子さんです。日本で千人にも満たない死者の中で、とんでもない稀な確率で超有名人の二人が亡くなることで、日本人は恐怖のどん底に叩き落とされました。

彼らはなぜ死んだのでしょうか？私は「新型コロナウイルス」によって亡くなったとは、どうしても思えません。それはあまりにも確率的に不自然だからです。これを考えるにあたり、「政治の闇」について考えてみたいと思います。そして「政治の闇」を考えていく時、日本の税金について考えていかねばなりません。

日本の政府は、税収は約50兆円、借金は約50兆円で、約100兆円の予算を組んでいます。これを「一般会計」と言います。しかしその背後には「特別会計」があり、日本の純粋な税金は、本当は約250兆円です。「特別会計」こそ日本の本物の税金であり、このお金については経済学者も、政治家も知らず、ましてやかつての宮澤喜一財務大臣すらも把握しきれれておりませんでした。

民主党の石井紘基こうきという政治家は、国会議員が持つ「国政調査権」という憲法で認められた権限を使って、この日本の本当の税金「特別会計」を暴き、このお金がどこに消えているのか、それを国会で暴露しようとした。するとその3日前の2002年10月25日に、彼は殺されてしまいました。彼は亡くなる直前、周囲の人々に「これで日本はひっくり返る」と、話していたそうです。石井氏を殺したのは、指定暴力団の山口組系右翼団体（「構成員即ち代表」の一人団体で、いわゆる「右翼標榜暴力団」）の代表、通名「伊藤白水」、本名は尹白水いんはくすいという在日朝鮮人です。

刑務所送りとなった尹は、2010年10月に放送されたテレビ朝日の報道番組『ドキュメンタリー宣言 石井紘基議員殺害事件の真相』の中で、「最初に3000万円、次に1500万円もらって、殺害を頼まれた」と明確に答えています。つまり尹白水はヒットマン殺し屋だったわけです。しかし彼に殺害を依頼した人物が誰なのか今も謎のままです、罪を問われていません。これが日本の警察であり、検察であり、最高裁の実態です。

米国のデヴィッド・カプラン、あるいはアレック・デュブロという2人のジャーナリストは、1986年に、日本のヤクザと右翼をテーマにした『Yakuza』という本を出版されました。その書籍の中で彼らは次のような驚くべきことを述べています。

「戦後、GHQ占領軍は、地主制度、財閥、軍部と共に、ヤクザも解体すべきであった。しかしGHQ占領軍はそれをせずに、ヤクザの社会的な存在を容認すると共に、さらにヤクザが不法に勢力を拡大しようとするその動きを黙認したり助長したりもしてきた。つまり戦後のヤクザはアメリカによって生まれた。これが本書を書く動

機であった。これを証明する証拠や資料は、米国立公文書館の機密解除文書から得た」

信じがたいことは承知ですが、米国のジャーナリスト2人が、「戦後のヤクザはアメリカによって生まれた。その証拠は米国立公文書館の機密解除文書にある」と述べているわけです。つまり悪魔勢力は日本において、岸信介から安倍晋三といった政治家、官僚、マスコミ人のみならず、時には暴力団をも利用してきた可能性があるわけです。

さて、「税金・特別会計」、あるいは「暴力団」という面から、「政治の闇」について触れてみました。さらに「政治の闇」に踏み込むのなら、「銀行・通貨発行」の問題があると言えるでしょう。第16代大統領エイブラハム・リンカーンはこう言っていました。

「政府は自分で必要な費用をまかない、一般国民の消費に必要なすべての通貨を流通させるべきである。通貨を創造し、発行する特典は、政府のたった一つの特権であるばかりでなく、政府の最大の建設的な機会なのである。このシステムを取り入れることによって、納税者（国民）は計り知れないほどの金額の利子を節約することができる。」

それでこそお金が人間の主人ではなくなり、人間が人間らしい生活を送るために、お金が召使になってくれるのである」

現代人が、お金の主人として人間らしい生活を送っているのか、それともお金の奴隷と なっているのか、それは難しい問題ですが、しかしこの発言から約一カ月後、リンカーンは「グリーンバックス」という政府紙幣を発行して、そして暗殺されました。

また1963年6月4日、ジョン・F・ケネディ大統領も、アメリカの金融システムを再建しようとして、「大統領令11110」を発して、5ドルの政府紙幣を発行しました。するとその約5ヶ月後、彼はダラスにて謎の暗殺に遭い、そして彼が発行した5ドルの政



府紙幣も、すぐさま回収されてしまいました。

普通に考えてみて、なぜアメリカでは6人もの大統領が、暗殺未遂および暗殺に遭っているのでしょうか？その6人の大統領の共通点は何か？それは「お金を発行する中央銀行と対決した」ということです。アメリカで初めて暗殺未遂に遭った、第7代大統領アンドリュー・ジャクソンは言いました。

「銀行は私を殺したいだろうが、私こそ銀行を殺す。お前たちは腹黒い盗人の巣窟だ。私たちはお前たちを一掃する。永遠なる神の力によって、お前たちを必ず一掃する」

アメリカ大統領の中でも、銀行に殺された、あるいは殺されかけた大統領は大勢いましたが、しかし逆に銀行を閉鎖に追い込んで殺した大統領は、このアンドリュー・ジャクソンだけです。歴史書には歴代アメリカ大統領が何人も暗殺、あるいは暗殺未遂に遭ってきたことが書かれています。しかしどの歴史書にも、アンドリュー・ジャクソンの暗殺未遂事件の理由は何も書いてありません。それはリンカーンとケネディが、なぜ暗殺されたのか未だに不明にされているのと同じです。ジャクソン大統領は死の直前も、自身の大統領としての功績を尋ねられて、「通貨発行権を守ったこと」と述べています。

しかしアメリカでは、1913年に中央銀行の『FRB』が創設されて、アメリカ政府は「通貨発行権」を悪魔勢力である国際銀行家に奪われてしまいました。当時の第28代アメリカ大統領ウッドロー・ウィルソンは晩年、こう発言していたそうです。

「私はうっかりして、自分の国を滅ぼしてしまいました。大きな産業国家は、その国自身のクレジットシステムによって管理されています。（民間中央銀行FRBが設立されたことによって）私たちのクレジットシステムは一点に集結しました。」

したがって国家の成長と私たちのすべての活動は、ほんのわずかな人たちの手の中に有ります。（通貨発行権が奪われたことで）私たちは文明開化した世界においての支配された政治、ほとんど完全に管理された最悪の統

治の国に陥ったのです」

このようにアメリカは1913年に「通貨発行権」を奪われて、金融的に侵略を受けました。日本も先の大戦に敗れることで、金融侵略されました。しかしアメリカでは今、「トランプ革命」が起きています。トランプ大統領はマスコミによる誘導によって悪人に仕立て上げられています。ドナルド・トランプは大統領選挙に勝ち、ホワイトハウスに入ると、アンドリュー・ジャクソンの肖像画を飾ったのです。これが何を意味しているかお分かりになるはずでず。

トランプは、大統領になった翌年の2018年、ユダヤ人を自称しているジャネット・イエレンがFRB議長を続投することを望まず、ジェローム・パウエルという人物へとFRB議長を変えました。実はこれによって初めて、ユダヤ人を自称していない人物が、FRB議長になったとも云われています。国際銀行家たちによるその仕返しなのか、パウエルが新議長に就任した2月5日、株価が666ドルも暴落しました。「トランプ革命」の本当の意味、それは「1%VS99%の対決」における99%の大衆側の勝利だったのです。それはトランプ大統領の就任演説を見れば、歴然です。

「あまりにも長い間、ワシントンにいる一部の人たちだけが、政府から利益や恩恵を受けてきました。その代償を払ったのは国民です。ワシントンは繁栄しましたが、国民はその富を共有できませんでした。政治家は潤いましたが、人々の職は失われ、工場は閉鎖されました。権力層は自分たちを守りましたが、アメリカ市民を守りませんでした。彼らの勝利は、皆さんの勝利ではありませんでした。彼らは首都ワシントンで祝福しましたが、アメリカ全土で苦しんでいる家族への祝福は、ほとんどありませんでした。【中略】

私は全力で皆さんのために戦います。決して失望させません。アメリカは再び勝利します。これまでにない勝利です。雇用を取り戻し、国境を回復し、富を取り戻し、そして、夢を取り戻します。アメリカを再び偉大な国にします。ありがとうございます。皆さんに神の祝福がありますように。そして、アメリカに神の祝福がありま



すように。ありがとうございます。アメリカに神の祝福あれ」

演説にはこうあります。「権力層は自分たちを守りましたが、アメリカ市民を守りませんでした。彼らの勝利は、皆さんの勝利ではありませんでした」と。(The establishment protected itself, but not the citizens of our country. Their victories have not been your victories; their triumphs have not been your triumphs;) この「establishment(エスタブリッシュメント)(権力層)」「こそ、「1%の超巨大な大企業」であり、彼らのことを「グローバリスト」とも呼び、その中枢が悪魔勢力・国際銀行家なわけです。アメリカはたしかに今、革命の最中にあります。

「政治の闇」、「医療の闇」など見てくると、心が暗く落ち込みがちですが、しかし勝利の革命はすでに始まっており、もはや革命は起きているのです。トランプ大統領は「エスタブリッシュメント」や「政府の役人」のことを「ディープ・ステイト(Deep State)」と呼んでいます。そのうえで彼は、「沼の水を抜け(Drain The Swamp)」という比喩を使って、「彼らを排除せねばならない」というメッセージを発信しています。ボウフラがわいて、悪臭を放っている「沼」のイメージと、腐敗した既得権益者のイメージを重ね合わせているわけです。そして実際にトランプ大統領は、2020年4月、『FRB』を実質上、国有化することに成功しました。だからアメリカは「ロックダウン」しても、国民一人あたりに毎月、大人一人あたりに1200ドル(約13万円以上)支給することができているのです。『FRB』が戦争のためではなく、国民のためにお金を発行する、これはアメリカの歴史上、始まって以来の出来事です。日本も金融侵略から脱却すれば、日本人はお金の主人となって、見違えて豊かな暮らしが実現できるのです。

しかしトランプは、フェイクニュースを流され続けて、まるで「暴君」のように報道されています。そして「ブラジルのトランプ」と呼ばれている人物に、ジャイル・ボルソナロ大統領がいます。彼はこれまで、「コロナは、ただの風邪」と主張してきました。しかし2020年7月5日にボルソナロ大統領は体調を崩し、38度の発熱

があつたために検査を受けたところ、新型コロナウイルスの感染が判明しました。その後、ボルソナロ大統領の高熱は下がり、記者の前で「調子はとても良い」と話しました。そしてボルソナロ大統領は、トランプ大統領がかねてより新型ウイルス治療薬として推奨している、抗マラリア薬の「ヒドロキシクロキシン」や、抗生物質「アジスロマイシン」を飲んでいると述べました。

しかし専門家や製薬会社は、この二つの薬に対して、「どちらも新型コロナウイルスへの効果は認められていない」としています。しかしジユディ・マイコヴィッツなど複数の医師たちも、「抗マラリア薬の『ヒドロキシクロキシン』は、新型コロナウイルスに効果があり、科学的根拠もすでにある」と述べています。悪魔勢力が営む製薬会社、そして彼らに飼われた専門家と、トランプ大統領、ボルソナロ大統領、ジユディ・マイコヴィッツ、どちらの言葉に真実があるか、どうかご自身でご判断ください。

とにかく忘れてはならないこととして、「新型コロナウイルス」には、まだ分からないことがある、ということです。しかし「コロナパンデミック」には多くのインチキがあることも事実です。そして志村けんと岡江久美子さんがどうして亡くなったのか、それは定かではありません。しかし彼らが亡くなったことよって、日本国民に恐怖心が植え付けられたことは確かであります。そして悪魔勢力は、『天使VS悪魔』悪魔勢力は存在する』という動画をご覧になればご理解いただけるのですが、平然と赤子の生き血をすすって生きるサイコパスであり、平然と殺戮を行える者たちでもあります。

オウムが悪魔の手先の可能性

敵は悪魔勢力です。ならばこちらは天使の軍勢、もしくは神の勢力とならねばなりません。だから「武士道が大切である。侍精神が大切である」と、私は想い、それを訴え続けているわけです。なぜなら「武士道とは神儒

仏の融和」と言われているように、武士道とは日本の神道、中国で始まった儒教、インドで興った仏教、この三つの宗教が、この日本という和の国で、奇跡的に融和することで伝えられてきたものだからです。武士道から日本の精神とも言える「侍精神」が培われてきたからです。

神道とは、八百万の神々を信じ仰ぎ奉りながら、神へと通じる道、つまり随神かんながらの道を歩むことで、自らもまたこの日の本から世界をより素早くせんとする日本独自の宗教です。儒教とは、仁や義や礼や勇といった徳目を大切に、徳高き君子をめざして、天下国家のために戦う中国で始まった道徳的な宗教です。仏教とは、自らがあゝの世からこの世に生まれてきたこと知り、執着を断ち切つて無我の境地を目指し、偽物の自分を捨てて、本物の自分、すなわち真我を見出し出していく、インドで興った悟りの宗教です。

人間を「家畜」と考えたり、「物質の塊」と考えたり悪魔思想を持つ者たちに勝利するためには、まず私たち一人一人が現代の武士道を歩んで、そして壊された精神を立て直して、侍精神でもって悪魔勢力に立ち向かっていくことが大切です。なぜなら「自分たち以外はゴイムである」などという家畜思想に打ち勝つには、「生きとし生ける者、皆が尊く、すべての人に悟りの可能性がある」という仏教的な思想でもって戦うべきだからです。悪魔勢力が最も忌み嫌っているものは、人間の神仏への信仰心であり、そして信仰の中で精進して、自らの精神を鍛え上げ磨いていくことです。

しかし先の敗戦を一つのキッカケに日本人への信仰心は薄れ、そして戦後七十年、日本人の信仰心はさらに廃れ、そして精神医学の流行と共に、武士道精神も廃れてきました。そしてそれには「オウム」という宗教を語った組織が、「サリン事件」などの社会的事件を起こしたことも理由の一つであり、そしてこれも実はけつして偶然ではないでしょう。

実はオウムは、悪魔勢力と繋がりがあつた可能性があるのです。たとえば石井紘基こうき氏は通名「伊藤白水」、本名は尹白水いんはくすいという暴力団員の在日朝鮮人に殺されましたが、オウム幹部の村井むらいという男性も、徐祐行せうへんという暴力

団員の在日朝鮮人に殺されております。在日朝鮮人の右翼は、オウム幹部を殺害する必要がありますのでしょくか？
ドナルド・ユーン・キャメロン博士という人物は、「世界精神医学会」の会長も務めていました。そして彼は「人間の脳にLSDの投与や電気ショックを与えて白紙の状態、無意識の状態にして、その状態の中で命令を下せば、人間をマインド・コントロールできる、つまり人々を洗脳できる」と考えました。そしてこのドナルド・キャメロン博士を中心に、アメリカとカナダの両国のあいだで、「洗脳実験」、「マインドコントロール実験」が繰り返されていきました。

この恐ろしい実験の名を「MKウルトラ計画」と言います。「MKウルトラ計画」は、CIAが極秘に実施していた非人道的な洗脳実験のコードネームで、1950年代初頭から少なくとも1960年代末まで、被験者にまったく内緒で行われてきました。1973年、当時のCIA長官リチャード・ヘルムズという人物が関連文書の破棄を命じたものの、しかし辛うじて残されていた数枚の文書が1975年になって、アメリカ連邦議会で初公開され、世間を騒がせました。ですから「アメリカとカナダでMKウルトラ計画という洗脳実験が行われていた」ということは、公然たる歴史的事実なわけです。

そしてこの「MKウルトラ計画」の研究は、『拷問と医者』という一冊の書籍にまとめられました。そしてさらに何とも厄介なことに、この洗脳を研究した書物が、オウムの幹部で医師であった林郁夫の手にと渡ります。オウムの付属医院の医師であった林郁夫は、自著『オウムと私』という本の中でも、裁判の中でも、この『拷問と医者』という書籍について触れています。こうして単なるヨガ団体であった『オウム神仙の会』は、CIAが研究したマインドコントロール技術を駆使して、エセ宗教団体として発展していくわけです。おそらく幹部の村井は、口封じのために殺されたのでしよう。

では、オウムには、いったいいかなる秘密があるのでしょうか？元陸上自衛官の陸将



補であられた池田整治氏は、次のように述べておられます。「地下鉄サリン事件を起こしたオウムの背後には、実は北朝鮮がいて、その背後にはCIAがいて、CIAを操っていたのは国際権力であった」と。この発言も動画でご覧になれます。

元自衛官の陸将補の池田氏が述べる国際権力とは、本書で述べている悪魔勢力のことです。世間を騒がせ続ける北朝鮮ですが、金正恩はスイスに留学していたことが分かっています。そしてスイスとは国際銀行『BIS』のおひざ元であり、『成長の限界』を書いた『ローマ・クラブ』の本拠地でもありますから、北朝鮮と悪魔勢力に何らかの接触があった可能性は、十分に考えられます。そしてニセ札作りからドラッグの製造、そして拉致など、北朝鮮とオウムには類似性があります。

そしてオウム事件あたりの90年代から、日本ではマスコミを通じて、「心の風邪」などと称して、「ウツ病 キャンペーン」が繰り広げられて、駅という駅、町という町に精神科クリニックが立ち並んでいきました。こうしていつしか心疲れた多くの人々が、「宗教は怖い。精神医学は良い」という価値観にもとづいて、精神科クリニックに通うようになっていきました。まさにオウム事件によって、日本人の精神はさらに破壊されたわけです。

さて、信じがたいことは重々、承知ではありますが、緻密で狡猾な悪魔勢力は、もしかしたらオウムまで使って、日本国民に宗教に対する誤解と偏見を植え付けて、武士道精神を破壊していた可能性もあります。そうやって彼らは、日本人から武士道および侍精神、そして神仏への信仰心を奪い取ったのかもしれない。もちろんこれは私の推測です。

しかしCIAによってLSDを使用した「MKウルトラ計画」が現実にあつたこと、その計画をまとめた『拷問と医者』をヒントに、オウムがLSDを使用してマインドコントロールを実際に行っていたこと、元陸上自衛隊の陸将補の方が「オウムの背後には北朝鮮がいて、そのさらに背後に国際権力（悪魔勢力）がいた」と述べていること、オウム事件あたりから精神科が日本で流行っていったこと、そしてこれらの事実と、これまで本書で

あります。そしてその「教科書」を使って授業する学校の先生にも、やはり「権威」があります。

人は「権威」には弱く、そしてその「権威への弱さ」が、災いに転じることがたしかにあるわけです。

たとえばとある医師が、3歳児に「発達障害」と診断して、「ストラテラ」という薬を処方して、シロップ状の薬を飲ませていたことがあります。しかしこの薬も、脳に直接作用するために安全性が高いわけではなく、添付文書にもはつきりと、「臨床試験で本剤投与中の小児患者において、自殺念慮や関連行動が認められている」と書かれています。そして実際に自殺関連の事象が報告されている危険な薬でもあります。しかしこの「ストラテラ」の添付文書には、もつと恐ろしいことが書かれてありました。それは「6歳未満の幼児に対する有効性及び安全性は確立していない」ということです。

つまり3歳の赤ん坊に「発達障害」と診断し、有効性も安全性もまったく確立していない薬を処方する愚かな医師は大問題ですが、やはり問題の本質は、医師という「権威」に対して、簡単に大人しく素直に従ってしまうことにあると私は思うのです。「権威への弱さ」こそ問題なのです。

『WHO』、その配下にある『CDC』や『厚生労働省』、あるいはそれらの指示に従う医者や専門家、もしくは彼らを次々に出演させているテレビマスコミ、そして彼ら専門家が作り出している教科書、それを使用する先生たち……、このように実は「医療における権威」というものは、まるで一直線につながっております。しかし「医療の権威」には、『タルムード』の家畜思想が絡むことで、根幹から問題があります。

科学者アインシュタインは言います。「何も考えずに権威を敬うことは、真実に対する最大の敵である」と。

「考えずに権威に従うことは真実への迫害」、それは確かに言えることでしよう。しかし医療がこれだけ腐敗している以上、「何も考えずにWHOから連なる医療の権威に従うことは、もはや自殺行為であり、殺人行為であり、大量虐殺であり、人類への破壊行為にあたる」とさえ、言えてしまうと私は思っています。極論を言えば、コロナパンデミックの現在において、何も考えずに「医療の権威」に従うことは、とんでもなく危険なことです。

大切なことは何も考えずに「権威」を敬い従うのではなく、やはり情報を集めて、その膨大な情報の中から真実を探し出して、そして考えることです。哲学者パスカルは「人間は考える葦である」と述べました。それはつまり「人間という生き物は川原に生える一本の葦のようにか弱い存在であるけれども、しかし人間には考えることができる。人間は考えることができるからこそ、最大の偉大なる尊厳がある」と、パスカルという方は述べたわけです。

政府とマスコミが平然とウソをつき、しかも人間が考える葦である以上、今、私たちが成さねばならないことは、「権威」に騙されることなく、自分から「真実」を集めることであり、「思考」することであり、「知恵」をめぐらせることであり、そして、勇気をもって「決断」をくだして、一秒でも早く「行動」を開始することです。なぜ「一秒でも早く」なのか、それはワクチン接種まで、残された時間がもう少ないからです。スーパーシティ構想が始まるのは、もはや目前だからです。

冒頭で述べましたように、「コロナと戦うか」、それとも「コロナの闇と戦うか」、この二つの戦いのうち、どちらかの戦いから私たちが人類はもはや逃げることはできません。もう私たちが逃げも隠れもできないのです。どちらにせよ、私たちには戦うしか残された道はないのです。

そして真実を知り、政府とマスコミの闇を見たならば、「コロナの闇との戦い」にこそ、私たちは立ち向かわねばなりません。「自分一人が戦ったところで・・・」、そう考えていては、この戦いに勝利はありません。むしろ「周りがやらないのならば、我こそは」と想い、現代の武士道として、勇気をもって立ち上がってこそ勝利が見えてきます。

我らは必ず勝ちます。正義は必ず勝利します。なぜなら悪魔は神仏に勝てないからです。これを読まれる貴方が、現代の武士として共に戦って下さることを、心より願ってやみません。

この小冊子の原価価格は、およそ100円です。
そして私ども一般社団法人『武士道』は、時代に対する危機感から、
本小冊子を街宣やイベントなどで、無料で配布もしております。
ですから本書を読まれて、「この真実を広めたい」と想われたのならば、
できれば100円以上のご寄付をよろしくお願いいたします。

【武士道へのご寄付は】

<https://busido.or.jp/y-donation> →

※クレジットカードで100円から、ご寄付いただけます。

【ゆうちょ】

当座(寄附受付)00280-4-105770

【ゆうちょ銀行】

店名:〇二九(ゼロニキュウ)当座:0105770

※銀行振込をご希望の方は、ゆうちょへ。

街宣も行っておりますので、ぜひご参加ください。
日時等の情報はホームページまで、よろしくお願いいたします。
ともに日本を護り、世界を救ってまいりましょう。

一般社団法人『武士道』

原価 100 円

武士道